Osaka University Knowledge Archive

Title	ディオン・クリュソストモス『トロイア陥落せず』：弁論術から歴史フィクションへ
Author(s)	内田, 次信
Citation	文芸学研究. 2010, 14, p. 61-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/46104
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ディオン・クリュソストモス『トロイア陥落せず』

――弁論術から歴史フィクションへ

内田　次信

Ⅰ　ディオンと『トロイア陥落せず』

(1)「黄金の口を持つ男」によるトロイア戦争新説

ローマ帝政期の「第二ソフィスト時代」における代表者の一人ディオン・クリュソストモスは、紀元四〇ないし五〇年頃から一一〇年頃まで生きたギリシア人弁論家･著述家である。小アジア・ビテュニア州に属するプルサ市（現ブルサ）の貴族の家に生まれた。「クリュソストモス」というのは、「黄金の口（弁舌力）を持つ男」という意味であり、その弁論の才を讃えて後代の人々がこのように呼んだ名称である。ただし彼は、主にローマ遊学以来と思われるが、ストア哲学にも親しんでいて、ストア的な、あるいはそれに近縁の犬儒派（キュニコス）的な思考法を基にした言説を行うことが少なくない。

彼の生涯に関して特筆すべきは、ドミティアヌス帝（在位 81 から 96 年）によって追放処分を受け、イタリアおよびビテュニア地域に立ち入ることを禁じられ、長期にわたって帝国内を放浪したという経歴である。これが、彼の精神史において大きな役割を果たす事件になったことは確かであろう。とくに、後記のように本『トロイア陥落せず』の解釈にとって重要な意味を持つ。

ここで扱う彼の第 11 弁論は、写本の原題を逐語訳すると、『イリオスは陥落しなかったという点に関するトロイア弁論』となるが、以下では、『トロイア陥落せず』と略称する。この作品では、当時のトロイア人を聴き手にする弁論という形式を取りながら、ギリシア軍のトロイア遠征を謳うホメロスの叙事詩によって貶められたトロイアの名誉を回復し、この詩人の「嘘」や「欺瞞」を明るみに出すかたわら、「真実」を究明して、トロイア戦叙述の書き直しを行なおうと試みる。トロイアこそ勝者であり、ギリシア軍による陥落はなかった、アキレウスはヘクトルによって倒された、等の大胆な新説――作者によると「真

説」――が唱えられる。

(2) トロイア戦伝説異伝の文学と弁論形式という特徴

これは、「トロイア戦争異説・異伝」のジャンルに属する作品である。ローマ帝政期に、この系統の文学作品がいくつかあらわされた。先行作家たち、もっぱらホメロスによるトロイア戦叙述に、多くの、しばしば重大な改変を加え、ホメロスの創作に対する批判や対抗意識をしばしばあらわに示しながら、この主題に関する新しい記述を提示しようとする作品群である。題材的にホメロスの作品と重なりながら、意識的な対抗精神に動かされる創作を盛り込む形式として散文に依拠するという点で、ホメロス叙述の隙間を埋める内容を詩文で歌うクイントゥス『ホメロス後』などとジャンル的に区別しうる(1)。現存するものとしては計四篇数えられる。すなわち本篇の他に、ダレース『トロイア陥落史』(2)、ディクテュス『トロイア戦日記』(3)、ピロストラトス『ヘロイコス(英雄が語るトロイア戦争)』(4)である。なおルキアノス『鶏』も一部そういう内容を含む(5)。

この系統の中で本篇は、卓越した弁論家の作品にふさわしく、演説の形式を取っている点が特徴になっている。聴衆は、当時のトロイア市の民衆であるが、その地におけるアテナ祭典が演説の場か、という推測もされ(6)、そこに集まってきている他国のギリシア人やローマ人が聴き手に含まれていた可能性がある。また、歴史時代のトロイア人は、ホメロスで描かれるトロイア人を祖先として誇ったと思われるが、それとともに、ギリシア人の一派アイオリス人がトロイア戦後ここへ移住してきたとも伝えるので、その意味で、ここの市民はトロイア系でもありかつギリシア系でもある(7)。ディオンの視線が、トロイア人を主としながら、ギリシア人にも――さらにことによればローマ人にも――向けられていると思わせるのは、ひとつには、こういう事情にもよる（下記Ⅲ節も参照)。

後でも触れるが、この弁論は、祝典や慶弔などの行事において口演される演示弁論(8)の形式の中に、裁判所で行われる種類の法廷弁論的要素も含む。これによってホメロス叙述の「反証（反駁)」を効果的に行うとともに、反ホメロス的な「真説」をできるだけ緊密な論理の下に提示するための努力をそれだけディオンに払わせる結果になっている。「トロイア戦伝説異説」、すなわち歴史フィクションの試みはディオンに限るわけではないが、ここでは、弁論術の枠組

みと技術を介することによって、論理性や蓋然性を論証の強力な武器にしながら展開してゆく議論の仕方が、注目すべき効果を上げている。同時に、ホメロスの叙述を単に批判するだけではなく、それに代わるべき「真」の説が大胆な形で提示され、古代でもっとも大胆な歴史フィクションに導いている。奇抜とも称しうる発想が、論理的な足組みに基づいて構築されようとする。こういう論理性と大胆な説との結合が、本篇の特色である。

なお、ジロドゥーに、『トロイア戦争は起きないだろう』という劇があるが（劇団四季が公演している）、こちらは、伝統的なトロイア戦伝承に従いながら、ヘレネが誘拐された後、まだ戦争勃発には到っていない段階で、オデュッセウスが彼女の返還交渉にトロイア市内へ赴くといった内容を扱っている。ディオンの本篇と題名の点で若干似通っているが、材料も趣旨もまったく違うので、一言断っておく。

(3) 文芸論の伝統とディオンの神話・伝説アプローチ法

本『トロイア陥落せず』で展開されるホメロス批評の背景をなす文芸論の伝統や、ディオンの文学に対するアプローチ法について概観し、合わせて本篇の方法的特徴を簡単に記しておこう。

(i) 哲学的なホメロス批評の伝統　クセノパネスら哲学者たちからの神学的批判で、ホメロスやヘシオドスの叙述にある神々同士の姦通や詐欺などの話は、人間社会でも恥ずべき行為と見なされていることを超人間的存在に帰する叙述であると非難される。この種類の批判の集大成が、プラトンの『国家』で展開される。神々は人間が範とすべき鑑であるという観点から、これは道徳論的な性質も持っている。ディオンは、ストア派の人間として、哲学的な、主に道徳論的な観点からの発言を、さまざまな文脈の中で、ホメロス等について行う。しかし本篇では、「神々が苦痛を感じ……という描写や、……神々の密通……（等）のことについては、すでに多くの人々に批評されているので、わたしは触れないことにする」(11・18) と述べられるように、神学上の視点からは改めて深くは追究されない。

（ii）歴史家たちの合理主義的批判　また、本篇では論理性や蓋然性を拠りどころにしてトロイア伝説の「真偽」を糾すという姿勢をしばしば見せる。これは次の弁論的方法とも関連するが、また、歴史として捉えた伝説を合理的に検証しようとするヘロドトス等の歴史批評法にも倣っている。歴史家たちは、ホ

メロスその他の詩作品における神話的要素を、不合理あるいは荒唐無稽と見なして、合理主義的な解釈を加えたり、伝承の修正を提案した。たとえばヘロドトスによると、ヘレネはトロイアには行かずエジプトに留まった、パリスは彼女をそこに残して虚しくトロイアに帰ったが、「ヘレネ誘拐」を信じるギリシア人たちは遠征軍を組んで攻めてきた、トロイア人たちが、ヘレネはここにはいないといくら説明しても彼らは納得せず、長期にわたる戦争になった、という(『歴史』2・112 以下)。ヘロドトスでは「神の懲罰」についても語られるが (2・120・5)、本篇でのディオンは、神々の人間界への関与についてはおざなりに触れる程度で、パリスの審判とアプロディテの話に対しては皮肉っぽく言及するだけである。こういう点は、ディオンのほうがもっと「合理的」とも言える。なお、エジプト人神官の証言という虚構的な設定は、ヘロドトス（あるいはアトランティス伝説におけるプラトン）に倣っているが、虚構的証言（証拠）は弁論術に認められた方法でもある（後記)。

（iii）弁論術的裁判的議論　さらに本篇では、弁論家としての本領を発揮し、弁論術の技法を駆使しながら、あたかも法廷弁論で真実を究明するかのように、ホメロスの叙述を俎上に載せて批評する。仮想弁論的方法ということで言うと、『オリュンピアのゼウス像と神の観念』でも、彫刻家ペイディアスへの糾弾と彼の弁明という形式が採用されているが、ここでは「ありそうなこと」とか、「信じうる（納得しうる）こと」等の判断基準がはるかに厳しく適用されようとする。これについては、「ホメロスの鞭（論難者)」と称されたゾイロスによる弁論的攻撃法の先例がよく知られている（後記)。

（iv）テキストに基づく解釈　詩人を批判するよりも、むしろそのテキストに即しながら、その意図や文意を読み取ろうとする方法が『ネストル』や『クリュセイス』などで採られており、今日の文学の解釈法にある程度近い。しかしこのある程度学問的方法は、『トロイア陥落せず』では、むしろ負の方向に、つまりホメロスのテキストの論難のために、利用される。

(v) 自由創作的な想像力　ギリシア・ローマ人の神話叙述においては、自由創作的な側面が小さからぬ位置を占める。ディオンは、物語の巧みな語り手としての顔を持っている。たとえば第 7 篇『エウボイアの狩人』には、嵐の中エウボイア島に漂着した彼が、島の純朴な猟師と遭遇して手厚くもてなされた経緯を生き生きと語る部分が含まれ、ギリシア文学史上の傑作のひとつである。それがどこまで彼の実体験を記録しているか確かではなく、むしろ少なからぬ

部分が田園小説的な創作と推量されるが、いずれにしても独特の「個人的体験」を作中に織り込む作家は当時として稀である[9]。そのような文学的想像力が、本『トロイア陥落せず』という歴史フィクションを作り上げるさいにも役立ったであろう。これは批評の手段そのものとは言えないが、本篇では批評と実践とが密接に結びついており、ホメロスの叙述の否定と、ディオン自身の新説とが、個々の事件において互いに組み合わされている場合が多い。

これらの方法ないし手段のうち、弁論術的なものが中心にされつつ、必要に応じて他の種類のものも組み合わせて用いられる。

(4) 「驚嘆すべき独自性」と解釈の困難さ

『トロイア陥落せず』で示される主旨の大胆さや、議論の進め方の巧妙さは読者の目を引く。四世紀のキュレネ（北アフリカ）出身ギリシア人シュネシオスは、「ディオンの着想力を特徴付ける驚嘆すべき独自性」に言及しながら、それを例証する一作品としてこの『トロイア陥落せず』を挙げている[10]。

しかしその議論があまりにも大胆で反通念的であること、しかもそれが、他の著作家によるトロイア伝説ないしホメロス論と比べてのみならず、ディオン自身の他の作品で見られるホメロス論とも必ずしも整合的とは思えない側面を含んでいるので、この作品の性格付けや作者の意図、ディオンの創作全体におけるその位置、あるいは言論（文学）作品としての評価をめぐって、さまざまな意見が生じている。

しかし、本篇にかんする総合的解釈や評価の問題は後で試みることにして、まずその内容を大まかに見ることにしよう。

Ⅱ　『トロイア陥落せず』の内容概観

(1) 全体の構成、各部分の主旨と基本的意図

全体は四部分に分かれると考えられる。

第一部（1 から 3 章まで）では、序として、「真実を学び直すことの難しさ」という主旨の下、一般に古くから虚偽が幅を利かしてきている場合に、人々が真実を学び直すことは困難であることを述べる。

第二部（4 から 37 章）の主旨は、「ホメロスの叙述の虚偽性」と「わたしの説の真実」ということであり、弁論術で言う主題の提示に当たる。まず、反ホ

メロス的な立場を明らかにするとともに、本篇で主張しようとする論が、その独自性のゆえに、聴衆に受け入れられがたいであろうことを述べる（ここは、第二部の導入部的な役割を果たしている）。そして、ホメロスによる神々に関する叙述について、（プラトン等による伝統的な）神学的批判にはとくに立ち入らず、むしろ神々の行動に関する叙述法に疑念を呈する。そして、それよりもさらに、詩人のトロイア戦叙述に対して非難を向ける。彼は、「事実と反対のこと」を述べようとして、その叙述に誤魔化しと糊塗を加えている、と。「事実と反対のこと」というのは、第三部で詳しく論じられるように、トロイア戦に関する伝承――それはホメロスの創始によるのであり、他の詩人たちはそれに追随したものとされる（109 章，92 章参照）――において、基本的な事件になっているヘレネ誘拐とか、トロイア陥落などに関して言われている。それらの「真相」は逆なのだ、と。

第三部（37 から 144 章）では、「トロイア戦争の真実」という本論全体の主意を、ホメロスによる叙述へのより具体的な批判と絡めながら、詳しく緻密に展開する。弁論術で言う論証に相当するが、これには反証（ここではホメロスへの反駁）と立証（自説の証明）とが含まれる。全体的な設定として、「わたし」が、あるエジプト神官から真相を聞いたということにされる(これは第三部の導入部である)。かつて、トロイア戦の中心的当事者メネラオスが、戦後にエジプトの人間になった折に――ギリシアには戻らなかったという――、土地の者たちに語った話が記録に留められたのが、神官の情報源だという。そして、少女時代のヘレネがテセウスに誘拐されたのを兄弟ディオスクロイが取り返し、あまつさえテセウスの母アイトラを復讐に拉致してきた事件――これはほぼ伝承どおりの説――から語り始めて、パリスからの公式の求婚およびスパルタ人による彼の婿としての正式の認定――これは全くの新説、つまりディオンのフィクション――、それを侮辱として憤ったギリシア人たちによる遠征決行、というように順次話が進められる。議論の途中で、ホメロス的な記述、また彼に由来するとされるトロイア戦伝承に対する具体的な反駁が随時織り込まれる。最後に、ギリシア軍の絶望的状況とトロイア・ギリシア両軍の停戦協定、そしてトロイア人によるイタリア等への華々しい――落ち武者としてではない――植民派遣の叙述に至る。

結部の第四部（144 章から最後の 153 章まで）では、本論が信じられがたいであろうことをふたたび述べつつ、この説は、陥落時にさまざまな野蛮行為を

トロイア人に加えたと伝承で伝えられるギリシア人にとっても、その咎を除くがゆえに、むしろ名誉になるものである、などと主張する。

また各部の基本的な意図としては、第一部と第四部とにおいては、聴衆からの反発や戸惑いをあらかじめ見越して、彼らの反感を予防的に和らげたり、彼ら自身にとってこの論が利益になることを訴えて好意を得ようとする。

他方、第二部では、ホメロス的叙述の方法を、より一般的な仕方で批判し、それによって示唆されるその虚偽性や信用しがたさを印象づけようとする。

そして第三部つまり本体部では、相手方に対するそういう「反駁（反証）」的な攻撃をさらに具体的な形で行いつつ、それと絡ませながら、作者側の説を提示する。こちらは、弁論術で言う自説の「立証」を行なうことに等しい。

以下では、具体的な内容をより詳しく見ることにしよう。

⑵ 各部の具体的内容

(a) 第一部（序）　真実を学びなおすことの難しさ

第一部の序で作者は、一般的に、人間にとって学ぶこと、とくに学び直すことは困難であると述べ、何か虚偽のことが古くから信じられている場合、その思い違いを正すことは容易ではないと言う。

> 人はだれしも教育されるのは困難だが、欺かれるのは容易である……。（そして教育より）もっと困難なのは学び直すということである。とくに、長い間、人々があれこれ虚偽を聞かされてきて（いる）……という場合にそうである。(1-3)

さらに、虚偽が幅を利かせるのは――真実が不快であるのに対して――それが名声をもたらしている場合、甘美であるからだ、という人間心理的な観察も述べられている。

そのような前置きで、古典として読まれ続けてきたホメロスに対する批判の論につなげるとともに、自説の受け入れられがたさへの予感も示唆する。

(b) 第二部　ホメロスの叙述の虚偽性

(b)-1 虚偽対真実

続く第二部では、初めのほうで、

とてもひどい嘘を皆さん(トロイア人)に対してついたホメロス(4)

という批評と、

真実を述べるわたし（同）

という言葉とを対比的に並べ、一方では、ホメロスによるトロイア戦叙述の虚偽という点を、さまざまな観点から示すとともに、他方で、それに代わる本弁論者自身による「真実」の説の提示を主題にすると予告する。

(b)-2 ホメロスの「虚偽」が有難がられる不合理さ

この第二部で、作者は、上記第一部の「長い間」信じられてきた「虚偽」という論点と関連させて、ホメロスの嘘という主題にいきなり踏み込み、同時にそれを自分の「真実」と対比させる。

あなた方（トロイア人聴衆）……も、とてもひどい嘘を皆さんに対してついたホメロスのほうが、真実を述べるわたしよりも信用できるとお考えになったとしても不思議ではない。……トロイアへの呪詛に他ならない……（ホメロスの）叙事詩を、幼いころから子供たちに教える一方、わたしが本当のことを話そうとすると、ホメロスよりずっと後に生まれた人間だというので、それを容認しようとはなさらないとしても、わたしは驚かないだろう。(4)

「呪詛」という、どぎつい表現は、幸あれかしという祈念などを行うどころか、トロイアの名誉を永遠に葬り去るかのような叙述を詩人がこの市に関して行っているという作者の主張に基づいている。この弁論は、トロイアの人々を前に行われたものと推測される。そして当時の歴史的トロイアが、神話的なトロイアに由緒ある起源を持っているという前提で議論がされている。

ところが、ホメロスたちの叙述による伝承では、決定的な敗北をこうむったトロイアはギリシア軍によって無残に滅ぼされる。だがそれでもトロイア人は、ホメロスの詩を有難がって、それを批判しようと試みる者を受け入れないだろ

う、という。

ここでディオンは、他の例証を挙げ、ふたたび人間心理の法則から説明する。たとえばギリシア軍総大将アガメムノンの故郷アルゴスで、彼の子オレステスが実の母を手にかけて殺したといった類いの有名な話に関して、それは真実ではないとアルゴス人たちに向かって語ったら、そう唱える者に彼らは怒り、市から追い出してしまうだろう。それは、

> 大部分の人間は、名声というものにとても心をそこなわれているので、何もわざわいを受けない代わりに無名でいるよりは、最大の不幸を味わう報いに自分の名を喧伝されることのほうを欲する。(6)

からである、という。そういう不合理な態度をディオンは「狂気」と表現して、人間の名声欲が基にあると繰り返し指摘する。

> それほどの狂気に大部分の人はおちいっており、それほどに彼らを妄念が支配しているのであるが、それは、できるだけ自分たちのことが話題になるよう人々が望むからである。しかし、それがどういう話であるかという点にはまるで頓着しない。(10)

このように、不幸な、自分にとって本来は不名誉な神話伝説を喜ぶ人間心理の不合理さを示して、ホメロスの作品の無批判な受容を戒めようとする。これはもちろん、弁論者自身がこれから述べようとする説にそれだけ注意を向けさせようとする手段の一つである。ここで彼が、

> あなた方(トロイア市民)にとっては、わたしに感謝し、進んで耳を傾けることが正しい態度である。なぜなら、あなた方の先祖(ギリシア軍と戦ったトロイア人)の名誉のためにわたしは熱心になっているのだから。(5)

と述べるのは、いわゆるカプタティオー・ベネヴォレンティアエ、つまり聴衆の好意を得ようとするために用いる言葉であるが、この一種の自己宣伝は、ホメロス的神話の後光を曇らせ、その権威を突き崩そうとする挑戦的な態度と組み合わされている。

(b)-3 神々に関するホメロスの虚偽

そのような一般的議論ののち、作者は、より具体的にホメロスの叙述に対する批判に向かう。そしてまず神々の描写法を槍玉に挙げる。たとえば、当時の歴史的トロイアでは女神アテナが主神として祀られていたが、ホメロスらによる神話伝説においてはアテナは、ヘラらとともにトロイアに対して強い敵意を抱きつつ、ときに父神ゼウスにも反抗しながら、市の滅亡を図ろうとする存在である。そういうホメロス的描写は、女神に、

> 不正義にも自分の都市を滅ぼ（そう）(11)

とさせているとディオンは指弾する。

その他、神々にふさわしい描写が行われているかという点からも批判が加えられる。

こういう論点においては、古くからプラトンら哲学者たちが、神々同士の戦闘や不倫行為などを描くホメロスの叙述は神々に対して不敬であると非難してきた伝統につながる。しかしディオンは、

> 彼（ホメロス）の作中にある、神々が苦痛を感じ、呻き声をあげ、傷つけられ、ほとんど死にそうになるという描写や、さらに神々の緊縛や請け合いのことについては、すでに多くの人々に批評されているので、わたしは触れないことにする。(18)

と述べ、この点に深く立ち入るつもりはないことを示す。

ここの議論の進め方はユニークである。プラトンその他の哲学的・神学的なホメロス批評に一部は基づきながらも、それ自体に言葉を費やすより、それを通じて、詩人の人間次元に関する「嘘」と虚偽的叙述法をクローズアップしようとするのである。別の種類のホメロス批評に触れながら彼はこう述べる。

> 神々の描写については、ホメロスを讃美する者も含め、ほとんど皆が、彼の言葉には全く真実がないと同意する。そしてこういう弁護を彼らは試みる――詩人は本気でそういうことを言ったのではなく、暗示とメタファー

を用いているのだ（ainittomenos kai metapherōn）、と。とすると、人間についても、彼がそのように語ることに何ら妨げはないではないか。神々について明確には真実を述べない男が、いや逆に読者がたいていはそれを嘘と見なすことを、しかもまったく自分のためにはならないことを、語る男が、どうして人間についても、どんな嘘であれ、つくのを躊躇うだろうか。(18)

ディオンはここで、プラトンらのホメロス批判に賛成するのはもちろんのこと、さらに、アレゴリー解釈をホメロスの作品に適用して彼を弁護しようとする「讃美者」たちの方法も、逆用的に、詩人の「虚偽」に関する証明の一助にしようとするのである。

アレゴリー（寓意）解釈とは、たとえば、神々にはありえない行動として古くから哲学者によって非難されてきた神々同士の戦闘描写に関連して、スカマンドロス河と鍛冶神ヘパイストスとの戦いは、水と火という元素同士のせめぎ合いを意味している、つまりそういう自然学的真理を暗示的に表現したものだと読み解き、ホメロスを「不敬」の咎から解き放とうとする試みである。

ここでディオンは、かりにそういうアレゴリー解釈者の考えるとおりだとすると、詩人の語り方はきわめて曖昧で、読者がふつう理解するのとはむしろ逆の内容がそこにはあるということになる。そのように神々という重大な主題をめぐって、表の文面とは異なる、むしろ逆の意味を持つ叙述方法を好む詩人であれば、人間次元に関する彼の語りにおいても、表面と内実とが齟齬しているはずだ。これは、ギリシア軍によるトロイア陥落等のトロイア戦叙述に真っ向から対立しようとする以下の本論をにらんで言っているわけである。このようにして、アレゴリー論者の詩人弁護を逆手に取ってしまう。

詩人は、愛する主人公オデュッセウスに、「作中でいっぱい嘘をつかせている」(17) と指摘して、ホメロスの性質そのものに虚偽への親近性があると説くディオンのここの主張は、

あらゆる事柄のうちで彼（ホメロス）がいちばん躊躇わなかったのは、嘘をつくということであり、それを恥ずべきこととも思わなかった。(19)

という要旨にまとめられる。

神々同士の戦闘や不倫については触れないことにする、と述べるように、こ

こでは神々の存在や言動に関わるファンタジー的要素よりもむしろ人間次元の叙述について議論をするという方針を示すディオンである。これは、プラトンらの神学的な批評法を中心にするのではなく、むしろ弁論術の手法と視点からホメロス批評を行おうとする態度に対応している。

(b)-4 トロイアをめぐる仮想裁判と裁判的議論法

ホメロス批評は古代の文芸論においてすでに長い歴史を有していたが、弁論家ディオンはこの演説で、法廷弁論的な形式や趣向も取り入れながら議論を進めようとする。

> あなた方（トロイア市民）にとっては、わたしに感謝し、進んで耳を傾けることが正しい態度である。なぜなら、あなた方の先祖（ギリシア軍と戦ったトロイア人）の名誉のためにわたしは熱心になっているのだから。(5)

という言葉で、これはトロイアの名誉の弁護にために行われる議論だということを示そうとする。すなわち、トロイア戦争の叙述において「とてもひどい嘘をついた」というホメロスは、トロイアを侮辱しその名誉を毀損している。この作品は、ある意味では、トロイアとその名誉をめぐって、ホメロスと、告発者ディオンとの間で行われる仮想裁判である。皇帝への侮辱罪を問う告発などが参考になるかもしれない。ちなみにディオン自身が、老年のときと思われるが、プルサにおいてそういう侮辱罪の被告になりかけたことがある（小プリニウス書簡 10. 81 参照）。

この作品は、本来は、演示弁論と呼ばれる種類に属していて、法廷弁論や政治弁論とはこの点では異なっている。演説の種類をアリストテレスらに従って分類すると、三つに分けられる。うち二つ「政治弁論（ブーレウティコン）」と「法廷弁論（ディカーニコン）」は、現実的利害に深く関わる種類のもので、政治問題、あるいは法廷の係争案件をめぐって、実際の特定の聴衆を前に議論を行い決着を目指す。この二つに対する「演示弁論（エピデイクティコン）」は、祝典などで、特別の現実問題とは離れて口演されるものであり、ある程度今日の「式辞」に通じるところがあるが、単に式進行を助ける形式的な演説ではない。話される対象の称賛や非難を展開しつつ、演説者の力量もそれを通じて発揮される機会を提供する。

しかし演示弁論はある程度融通無碍なところがあり、法廷弁論や政治弁論的な要素を取り込むことが可能である。この点では、政治的、法廷的そして演示的、というアリストテレス的な弁論三分法はきれいには適用できない。それはともかく、演示弁論は上記のように称賛または非難を主たる機能とする。したがって、今、トロイアの名誉という問題に関して、この市への称賛をホメロスへの批判と組み合わせようとするディオンが、その主題に好都合な趣向として裁判形式を取り込もうとするのは強引な方法ではない。

ディオンは、伝説の「真実」の究明に、裁判的な視点も利用しようとするのである。たとえば、『イリアス』冒頭の語り出し方について非難しつつこう言う。

> 戦争の叙述を企てた彼（ホメロス）は、ことの発端そのものからではなく、行き当たりばったりに語り始める……これは嘘をつく者がだいたい皆することで、ことを縺れさせ……そうすることによって、見破られることがそれだけ少なくなるからである。……こういうやり方は、裁判所など、巧妙に嘘をつく者たちがいる場所でも見られる……。(24-5)。

ことの核心に飛び込め（in medias res)、つまり、より瑣末な点は捨てて要所から語り始めよ、というホラティウスの詩論的な教えもあるが、ディオンはここではむしろこう主張する――裁判の審理において、当該事件の経緯に沿った順序正しい説明とそれに対する検証が要請されるように、ホメロスも、トロイア戦争の発端から時間軸に従って語るべきだった、そうしなかったのは、自分の「嘘」を誤魔化すためだった、と。発端というのはこの場合は、トロイアからのパリスのスパルタ訪問、そして彼によるヘレネ「誘拐」――本篇によると真相はスパルタ側の同意を得た結婚のための移住――という事件を指す。しかし『イリアス』では、そうされてはいない。これは、ヘレネがパリスの正式の妻としてトロイアに来たという点を含む「真実」を隠すため、錯綜した叙述順序で聴衆・読者を混乱させようとしたからだと非難する。

なお、ホメロスに対する裁判的弾劾という形式をとるが、言うまでもなく、ホメロスというはるか過去の人間を相手にする仮想の裁判である。

(b)-5 ホメロスの権威の切り崩しと新たな説の提示――「蓋然性」という武器

そのさい、論敵ホメロスの権威が大きい分だけ、その主張に対する反駁が重大な要素となる。反駁のことをギリシア弁論術の用語でアナスケウエー(anaskeuē)、ラテン語でレフーターティオー（refutatio）という。この相手の論の反駁とホメロスの権威の切り崩しが第二部では主となるが、第三部では反駁とともに、ディオン自身による新たな説の構築が試みられ、提示される。こちらは弁論術で言えば、自説の立証カタスケウエー（kataskeuē）、ラテン語でプロバーティオー（probatio）である。

アナスケウエー「反駁」という法廷的な技法は、相手の議論を切り崩すためにどのような論点を用い、どのような着眼点に拠るべきかというテクニックの知識の集大成である。アピタノン「信じがたい、納得しがたい点」とか、アプレペス「対象にふさわしくない点」とか、アサペス「議論の不明瞭な点」とかを相手の論の中に指摘し、その確実性を揺さぶって崩す攻撃法の技術である。

「納得しがたさ」といった視点は、上記の歴史家的な合理主義と通じる。歴史も法廷弁論も、通俗的な理性、悟性的論理を基礎にしようとする。そして弁論家は、「詩的」な、あるいは非理性的な論拠や動機には目を向けない。

> そういうこと（ホメロス的な伝承されてきた話）がありうるものかどうか。まずは自分が見たこともない女に誰かが恋するということ、次には、夫と祖国とすべての肉親を……小さな娘を……捨てて、他の民族の男(たる自分パリス)についてくるよう説き伏せる、などということが。(54)

自分が見たこともない、云々、という前者の論点はともかく、後者の、夫（メネラオス）や小さな娘（ヘルミオネ）等を捨ててまで、恋する男についてゆくという激情的行動は、叙情詩人サッポーによって、ヘレネの駆け落ちとの関連で、まさしく称賛的に言われ、肯定されている。しかしディオンが本篇で語らせるエジプト神官は、それは「ありえない、起こりえない」と、包括的にその可能性そのものを否定する。弁論家は叙情詩を軽視した[11]。ディオン自身、「歌（竪琴詩）、エレゲイア、イアンボイ、ディテュランボイは、暇のある者にはとても価値があるが、弁論を実践しつつその議論力を増そうと思っている者にはそういう閑暇は無い」(18・5) と述べているし、キケロも、「もし自分の人生が倍（の長さ）になってとしても、叙情詩人を読む時間は無いだろう」（セネカ書簡 49・5）と言った。サッポーのような有名な詩人であれば、ディオンにも知

られていたはずであるが、その声はいわば無視されている。現実の歴史を動かしうる非合理的な人間的な要因[12]を理解しようとしないという点で、本篇の方法的限界が認められるが、これは、その合理主義的原理を突き詰めた帰結の一つである。

他方、たとえば木馬に関するウェルギリウス等の詩的創作には、ラオコンを絞め殺す大蛇の怪異要素や、腹中にたくさんの――一伝では三千人の――ギリシア兵が潜んでいるのにトロイア人は気づかず、けっきょく城壁を壊してまでそれを中に引き入れてしまうといった腑に落ちない展開が含まれているのに対し、ディオン流の説明（121）は、その点、荒唐無稽な要素を排除し、よりすっきりした経過説明を示している。

(b)-6 「証拠」その一――叙述順序の混乱

24 章以下の本格的な反駁の部分では、まず、詩人の陳述方法に認められるさまざまな問題点を、嫌疑の「証拠」として挙げてゆく。「証拠」（ピスティス）はもちろん裁判用語であるが、ディオン自身がここで「裁判所」のやり方を持ち出して、法廷弁論的な議論に引き付けようとしているのである。ただしまだ総論的議論なので、「証拠」も個別的な種類のものではない。彼は言う。

> （トロイアの）戦争の叙述を企てた彼（ホメロス）は、ことの発端そのものではなく、行き当たりばったりに語り始める…。これは嘘をつくものがだいたい皆することで、ことを縺れさせ、紛らわしくして、順序立って話そうとはしないのが彼ら（嘘つきたち）のやり口なのだが、それは、そうすることによって、見破られることがそれだけ少なくなるからである。そうしないと、事柄そのものによって反駁されてしまうわけである。こういうやり方は、裁判所など、巧妙に嘘をつく者たちがいる場所でも見られることである。しかし、一つ一つのことを事実どおりに示そうとする者は、初めのことは初めに、第二のことは第二に、他のことも順次同様に、叙述してゆくものなのだ。(24-25)

ここでは、『イリアス』冒頭で、いきなり戦争十年目の事件から始めて、「アキレウスの怒りを歌え、ムーサよ」と語り始めるホメロスの叙述法を問題にする。ローマの詩人ホラティウスが、ホメロスは、トロイア戦争の遠い発端の話（へ

レネの卵）は放置して、「事件の核心に聴衆を引き込む」（『詩論』147sq.）と讃えているのとは異なっている。アリストテレスによるホメロス評価に連なる見解である。この哲学者は、ホメロス以外の叙事詩人による羅列的な描写法に対して、ホメロスによる題材選択的な提示のしかたを誉めている。これは詩作術の観点から言われているが、クインティリアヌスは、ディオンと同じ弁論術の立場から議論しながら、陳述の順序について、本篇とは相違する意見をこう述べる。

> 私は、常に陳述を事件が起こったとおりの順番でおこなうべきだと考えている人にはけっして賛同しない……むしろ効果的に陳述するほうが望ましいと思う。（クインティリアヌス『弁論家の教育』4・2・83、森谷宇一・戸高和弘訳）。

しかしディオンがここで問題にしようとしているのは、まさしくその「効果的」な、悪く言えば狡猾な叙述順序の操作なのである。それによって詩人は、読者に対して「ことを縺れさせ、紛らわしく」見せて、それだけ見破られにくくしているという。

この議論の仕方に疑問を感じる向きも当然あるだろう。ホメロスの叙事詩は文学作品であり、アリストテレスやホラティウスの考えるように、いかに読者を詩的な魅力でその世界の中に引き込むかという点が重要であるから、その一つの手段として話材を並び替え、叙述順序を工夫するのは、むしろ奨励される方法ではないか、と。

しかし他方では、少なくとも中核には史実が含まれていると見なされていたトロイア戦の叙述は、その意味で歴史記述に近い性格やドキュメント的な資格を持っていると受け止められた。そのような受容の仕方を物語る有名な例として、『イリアス』第2巻の船隊カタログの箇所で、

> アイアスは、サラミスから一二隻の船を率いてきた、
> そしてアテナイ人の部隊が位置するところにそれを置いた。(『イリアス』2・557-558)

という文をめぐる論争が挙げられる。アテナイとその隣国メガラとが、両国の

沖合いに浮かぶサラミス島の領有を争っていたとき、アテナイ人がこのホメロスの詩句を盾にとって、『イリアス』でサラミス王アイアスは自軍の船隊をアテナイ軍の陣営のあるところに止めたと言われている、だからすでにそのときからサラミスはアテナイの領土に属していたのだ、と主張したそうである。そういう国家間の係争においてもホメロスの詩句に根拠を求めることがありえたわけである。

したがって、ホメロスの作品に歴史的権威が認められるかどうかということを問題にする立場から言えば、事件の記述順序において文学的、詩的な「効果」を許そうとする見解とは相違して、むしろストレートで自然な陳述のほうをよしとするのは一理あるということになる。

(b)-7 「証拠」その二――曖昧な記述法とエートス論的議論

詩人の虚偽的創作ということに関して、その叙述法のもう一つの特徴をディオンは証拠に挙げようとする。実は、トロイア戦争においてもっとも重要と見なしうる事件の数々をホメロスは、かならずしも正面から取り上げて叙述しているとは言えない。たとえば戦争の発端である。先に引用したホラティウスの文ではそれを、ヘレネがそこから孵化した卵というエピソードに求めていた。しかしこれは、ガチョウの姿の女神ネメシスと白鳥に変身したゼウス神との交わりに端を発する、神話的に過ぎる話なので今は措くことにして、歴史的次元では一般に、トロイア王子パリスによるギリシア娘ヘレネの誘拐が戦争全体の原因として挙げられた。ところがホメロスの作品ではこの事件は、両国の間で戦争が続けられる前提として簡略に言及されるだけで、それ自体は叙述されない。この点についてディオンはこう論じる。

> 戦が起こるきっかけになった（とされる）不正そのものから、つまりアレクサンドロスの暴慢な行為（ヘレネ誘拐）から語り始めることほどふさわしいことがあったろうか？そうすれば、作品に接する者は皆いっしょに憤り、決着をつけることをいっしょに求め、トロイア人がこうむる禍の数々には誰も同情しないということになったのではないか。このやり方で、聴衆(ギリシア人)の好意と関心をそれだけ確保できたのではないか。(28)

もしそれが本当だったなら、堂々と詳しくその点をギリシア人聴衆に話したほ

うが、口演者としてずっと共感と成功を収められたはずではないか、という。これは一つには、「ギリシアびいき」のホメロスという、古代で一般に行われていた見方にかかわっている。たしかに詩人の描写には、トロイア側の悲劇的運命への同情的な眼差しが含まれていると見られるところがある。しかし、総じて戦の経緯全体に関しては、ホメロスの記述は、トロイア側に対して厳しい否定的なものになっている。そういう限りではホメロスの作品、なかんずく『イリアス』は、トロイアを貶め弾劾する傾向を持つと見なし得るのであり、それに対して本篇が反駁的な弁論を試みるわけである。ところが、この観点から言うとホメロスの論じ方は、指弾の対象の非をもっと明らかにする叙述法もあったのにそうしていない、というのである。その理由は、要するにその誘拐事件は作り事なので、ホメロスも正面きって堂々と語る自信がなかったからだ、とディオンは説く。

また英雄たちの死に関してである。これもホメロス的叙述の特徴の一つであり、そこでは、主人公や中心的戦士たちの死の場面が直接描かれることは原則としてない。アキレウスの死も、オデュッセウスの死も、予告的に触れられるだけである。戦争の原因者たるパリスについても同様である。主だった戦士としては、ヘクトルの死が扱われるくらいである。

そして戦争の結末である。一般にこの戦争は、後日談は別として、トロイアの陥落で終わることになっている。ホメロスのみならず伝承全体でそのように語られるわけであるが、本篇ではホメロスがトロイア戦に関する最初の記述者と見なされ（92)、後代の詩人たちは彼に従いながら、その驥尾に付して記しているだけとされるので（110)、「トロイア陥落」はホメロスによる提示に由来するということになる。しかしこの事件も、彼の作品では、中心的主題として正面きって語られることはない。『イリアス』では――まだ戦争最中のことを扱うので――ほとんど言及はなく、戦後の物語にかかわる『オデュッセイア』でも、比較的簡単な叙述にとどまる。これについてディオンはこう述べる。

> 彼（ホメロス）が、いちばん恐ろしい事件の数々を、さまざまな受難や禍を、さらに、皆がいちばん聞きたがる事柄を、語ろうとしたならば、トロイア市の陥落以上に重大な戦慄的な話題があっただろうか。……（それに関する）戦慄的描写によって人を震駭させ、細部を凝らして叙述することもできたはずである。(29－30)

せっかくそのように魅力的な話題があったのに、なぜ詩人はそれを活用して大々的に記述しなかったのか？ディオンの説明はこうである。

> （自然な創作順序をとらなかった）もう一つの理由は、彼が作品の初めと終わりをできるだけ曖昧にし、それらについて反対の印象を与えようと企んだ、ということである。それで、出来事の最初（戦争の原因）も、終わり（その結末）も、すぐに述べようとせず、それについて話すことを約束もしない彼であり、ときにはそれに触れることがあってもお座なりにそうするだけで、物事を混乱させようとしていることも明らかである。こういう点について彼は自信がないし、進んでそれを述べることもできなかったのである。……嘘をつくものは……自分が隠しておきたいことは前面に出すことはないし、……置くべき箇所にはそれを置か（ない）……。（核心の）点に到るときは、大きな声で話すこともない……。だからホメロスは、（嘘たる）ヘレネの略奪についても、その発端そのものから、隠し立てをせずに、語ることはしなかったし、トロイアの陥落についても同様だったのである。上述のように大胆な男であったとはいえ、真実と反対のことを語っていることを、また、物事の核心について嘘をついていることを、自分で知っていたので、気後れを感じ、逃げ腰になっていたわけである。(25-27)

これは、一種の状況証拠的な議論をしているわけである。裁判所などでの陳述で、「何か真実を述べる者は、自信を持って、何も臆せずにそうする」(27) はずであるのと照らし合わせると、戦争の発端や結末などの重大事件に関する詩人の記述は、順序などもことさら混乱させてある上に、それを語るときも「大きな声で」明瞭に話すことはしない。それは、聴衆が真相に気づかずそれとは異なる印象を抱くようにさせようとするずるい戦略でもあるし、また、陳述者の心中の言わばやましさを反映するという。この点は、弁論術で、話者の性格（エートス）が判定に与える影響を説くエートス論と関連する論法である。

なお、気後れを感じうんぬんとここで述べるのは、先の、詩人はどんな嘘でもつくのを躊躇わなかった(18)などという主張と食い違うわけではない。初めはいわばおずおずとそうしたのが、その後、嘘が見咎められないので、創作を進めるうちにだんだん大胆さをつのらせていったと言われるのである。詩人が

創作中に次第に方針を発展させていったという文芸論は、古代のホメロス論において本篇が占めるユニークな位置を示す一例である。

(b)-8 詩と弁論術の対比

これまで記してきたように、ホメロスとその叙事詩を、あたかも裁判所に引き据えて指弾し裁くような議論をするわけであるが、上記の歴史的権威うんぬんという観点の他に、弁論術で一般的に用いられる対比（シュンクリシス）の技法がここでは基礎になっている。いろいろな種類のもの同士が対比される。

ディオン自身の他の例では、第 12 篇での詩と彫刻の対比が有名である。そこでは、ホメロスの詩とペイディアス（フィディアス）の彫刻術とが、やはり裁判形式で対比され、後者に軍配が上げられる。今日の読者にとっては、ホメロスの詩を法廷弁論的な視点から扱うのは奇異に感じられるであろうが、このような伝統的技法に一部則っているのである。

(c) 第三部（本論）　ホメロスへの反駁と新説の提示

(c)-1 周到・綿密な議論

本論の第三部ではいよいよ、ディオンによる新説が、ホメロスの作品における個々の箇所に基づきながら、「反証（反駁）」と組み合わされつつ、展開されてゆく。周到・綿密な議論を積み重ねてゆくが、ここでは、もっぱら大筋に関わる議論を取り上げることにする。

(c)-2 論証（反駁および自説提示）と証拠

この本論部では、具体的なトロイア戦の経緯や事件のあれこれについて、ホメロスに対する反駁と、それに対抗する自説・新説の提示(「立証」)とをセットにして詳しい議論が進められる。全体の構築を支えるこれら否定的および建築的「論証」の二柱の基盤となり、素材となって、その強度を確保しようとするのが、「証拠」ないし「論証手段」の数々である[13]。反駁的にせよ建設的にせよ、どちらの主張にも、それを信じさせる、あるいはもっともらしく思わせる証拠の類いが求められる。この証拠的要素としては、物的証拠があればもちろん望ましいわけであるが、古い時代の伝説的事件を扱うので、信用できるものを持ち出すのは困難である（後述参照）。また古代では考古学的な方法は知られていなかったのである。なお、証拠と言われるものには、物証、証言や、状

況証拠のみならず、事例や推論的蓋然的証拠なども含められる。ホメロスの「作品そのものから反駁」(11) することも多いが、これは論敵の発言を証拠として利用するわけである。アレクサンドリア時代の学者アリスタルコスによって唱えられたという、「ホメロス (の詩句) をホメロス (自身の他の詩句や作風一般) から解明する」という方法論を巧妙に応用する[14]。

(c)-3 古代弁論術におけるフィクションの要素とその技法

ところで、これら、論証の二本の柱を立ち上げるさいに、全ての材料やパーツが弁論者の手元に揃っているわけではない。むしろ、どんな論争案件にせよ、誰をも納得させる明白な証拠が十分でないからこそ、争いが生じるわけである。そして古代の伝説を対象にする場合のように、明白な証拠が提示しにくい場合は、あるいは、より強力な議論のためにそれが効果的な場合は、フィクション的技法を用いることが古代の弁論術では容認されていた。この点はおそらく現代の法廷弁論と異なるであろう。もちろん、下手なフィクション（「カコプラストス」）であってはならず、聴衆が納得しうるもっともらしいフィクションでなければならない。

フィクションは、証拠に用いられるパーツというより、個々の証拠を形成する素材である。したがって、どういう種類の証拠にも利用されうる。以下のような説が唱えられた。

(i) （恒星球の運動速度に変化があるという説は）不合理で、フィクション (plasma) 同然である。（アリストテレス『天空について』289a6）.

(ii) （アマゾン族の反乱の記述は）神話やフィクションに似ている。（プルタルコス『テセウス』28）

(iii) 歴史記述の一つは歴史であり、一つは神話であり、一つはフィクションである。歴史とは、事実として起きたことに関する叙述であり……、フィクションとは、起きた事柄ではないが起きた事柄と同然に語られるものであり……、神話とは、起きなかった虚偽の事柄についての叙述である……。（セクストス・エンペイリコス『学者たちへの反駁』263-4）.

(iv) 弁論家には、何らかの点をそれだけ鮮明に言い表すために、歴史に関して嘘をつく (ementiri) ことも許されている。（キケロ『ブルトゥス』11. 42）.

(v) （証拠としての事例について）虚構的な (fictam) もの（法律）を範例に用いて、それだけ事柄が容易に理解されるようにすることは、決して妨げられ

ない。（キケロ、De Inventione 2. 118）

上記の（i）と（ii）は、フィクションに対して否定的な態度を示しているが、残りの引用例では、その役割や価値が認められている。また、「嘘をつく」の句を含む（iv）の文は、歴史叙述的な言説における「虚偽」つまりフィクションを肯定するものであり、ディオンがここでホメロスの「虚偽」を非難し、自らのフィクションすなわち「虚偽」を提示しようとする試みと興味深く思い合わせられる。

(c)-4 戦争の原因論――彼女は正式の花嫁としてトロイアに行った

まず、戦の原因として挙げられるヘレネ誘拐という伝承に関する反駁のほうから見ることにしよう。

上記のようにすでに総論的な第二部で、ヘレネ略奪ということを詩人は正面きって明瞭には扱っていないという点を、心理学的なあるいは状況証拠的な論拠にして、「やましいからだ」とする（27-28）。

ここでは他の証拠としてさまざまな点が挙げられるが、たとえば、ヘレネが、

> 夫と祖国と全ての肉親を……小さな娘……を捨てて他の民族の男について（ゆく）（54）

ようパリスに説得される、というのはありえること（デュナトン）ではない、と論じられる。可能性ないし蓋然性を根拠にした推論的論拠である。夫や子を捨ててまで、というここの点については、抒情詩人サッポーが、まさしくそれこそ恋する女のすることだという趣旨の歌を歌っており、情熱の讃美者には受け入れがたい理屈だろう。しかし、知的論理性を指針として重んじる弁論家の間では、抒情詩人的論理は軽視されたという点は、上で述べたとおりである。またゴルギアスが『ヘレネ讃美』で、言葉の説得力を強調して、ヘレネの駆け落ちを弁護しようとしたが、これはいわゆるパラドックス的な弁論であり、常識に反する議論をあえてするという試みを行っている。弁論術的論理や常識的通念に従うかぎり、本演説を聴いている聴衆にとっては、ディオンのここの説は首肯しうるのである。

また、ホメロスの「作品そのものから反駁」する（11）こともあると予告していたが、ここでは、『イリアス』の中で、ヘクトルがパリスをさんざんなじる

箇所を引用している。

> パリスめ、見目はよいが女狂いの詐欺師め、
> お前など……結婚する前に死んでいればよかったのだ。（『イリアス』3. 39-40）

そのように言うくらいなら、パリスが初めにヘレネを連れてきたとき、どうして反対しなかったのか、と言って、「虚偽と虚偽との間の矛盾」（56）をディオンは突く。これは、ホメロスの記述間の不整合性を指摘しているわけであり、テキストそのものによって示される証拠である。ただし、ホメロスのテキストという場合、広くトロイア戦の伝承が含まれていることがある。つまり、伝説初期を扱う『キュプリア』など、いわゆるキュクロス（「叙事詩の環」）の詩人たちによる叙事詩もホメロスの作品と見なされることがあった。少なくとも、伝承の基本点は、ホメロスとそれ以外の叙事詩人とで共通するのであり、しかもホメロスが最古の叙事詩人として後代の詩人たちに範を垂れた（92, 110）と言われ、伝説全体の張本人とされるのである。

反駁点のことに戻ると、誘拐そのものとの関連で、ディオンは、ヘレネの父テュンダレオスや彼女の兄弟が持っていたと考えられる強大な政治力、軍事力に触れる。たとえば伝承によると、ヘレネがまだ少女のとき、アテナイ王テセウスによってスパルタから誘拐されたことがある。このとき、ヘレネの兄弟ディオスクロイがただちにその後を追いかけ、彼女を取り返し、おまけにテセウスの母を捕虜として連れ帰るという復讐まで行った。アテナイという強国に対してそのような返報をすぐに果たすことのできたスパルタのこの兄弟は、

> 全ギリシアを敵にしても戦えるほどであり、その気になれば容易に皆を屈服せしめただろう（44）

という主張は、スパルタの軍事力の伝統的な名声も考え合わせれば、人を納得させ得たであろう。ところが、ヘレネが二度目に、今度はパリスによって誘拐されたときは、ホメロスや叙事詩人たちの記述によると、ディオスクロイは何もしなかったという。ホメロスでは、なぜ兄たちがトロイアに来ていないのだろうかと訝しがるヘレネの様子が記述されるが、その後の箇所で詩人自身によ

って、そのとき兄弟はすでに死んでいたと補足説明される。このテキスト間の食い違いをディオンはふたたび目ざとく指摘する。ヘレネの台詞から、誘拐時に兄弟が生きていたことをホメロス自身が示している。他方、兄弟のテセウスに対する復讐の伝承から、スパルタの一族の強大な力も明らかにされている。しかるに、

> 他のギリシア人は全て、利害関係はより小さかったのに軍勢に加わった、ところが、いちばん侮辱を受けたはずのカストルとポリュデウケス（ヘレネの兄弟）だけはトロイアに来なかったとホメロスは言う。こういう不首尾を隠そうとして彼はヘレネにこのことを不審がらせるが、後で弁明して、その前に彼らは死んでいたのだと付け加える。とすると、彼らの存命中に彼女の誘拐が起きたことは明らかである。それなのに彼らは、何とかして航海中を捉えるか、……自分たちの兵力で戦を仕掛けるかするために、すぐ妹の後を追いかければよいのに、そうはせず、アガメムノンが軍を集めるのに十年間ぐずぐずしているのを我慢したというのか？　（父）テュンダレオスその人さえも戦に行ったであろうし、その年齢もなんら障害にはならなかっただろう。（ギリシア軍中の老将）ネストルやポイニクスより年をとっていたのでもないし、彼らのほうが、父その人より、（娘の誘拐のことで）憤りを抱くのにふさわしい人物であるわけでもないのだ。(70－3)

テキストそのものおよび論理に基づくこの反駁には、おそらくホメロスも沈黙せざるを得なかったであろう。

(c)-5 求婚者の中にはパリスも交じっていた

ディオンは、ヘレネ誘拐伝承に対抗する説として、求婚者の中にはパリスも交じっていたと主張する（46 以下)。伝承では、ヘレネに求婚するためスパルタのテュンダレオスの館にギリシア各地から領主たちが集まったが、その中に異国人は数えられない。したがって、そこにパリスもいたと唱えるのはフィクションに属する。フィクションとは、ここでは、古典テキストや伝承による「事実」そのものとしては伝えられていないが、そうもあり得たと思わせる主張である。このフィクションをディオンはどのように根拠付けようとするか？

ここで彼は、類似の事例（範例、エクセンプルム）をいくつか挙げる（証拠

としての事例である)。異国からギリシアの娘の求婚にやって来たイタリア人や小アジア人の例、また逆にギリシア人が異国から妻を娶った例などが伝承から引き合いに出され、異なる国同士の、国際的な交流と婚姻は古くから珍しいことではなかったと示される。とくにその小アジア人の例がここでは重要である。つまり、トロイアに近い小アジア・シピュロスからギリシアにやって来たペロプスが、ギリシア・ピサ市の王女を娶ったという伝承であるが、これは一つにはトロイア人パリスとの連想を働かせる事例となるし、他方では、そのペロプスに発する一族ペロピダイに属するメネラオスがヘレネ求婚者の一員になっているということとの接点を提供するのである。ペロプス同様パリスが小アジアから来てヘレネの求婚者となったと主張しても無理ではない。また、ペロピダイ一族がすでにギリシアで王家を成しているという事実は、ギリシアと小アジアの交流がおおいに進んでいる証左であると同時に、同じ小アジア系のメネラオスがそうするのなら自分もという勇気を、あるいは後述のように彼と対比して自分の方こそという自信をパリスに与えるのである。

(c)-6 パリスをテュンダレオスらが選んだ

次に行われるフィクションは、そうやって求婚者となったパリスを、スパルタ王テュンダレオスらが選んだということである。ヘレネ誘拐という伝承の枠内で、非合理的な「情熱」を動機として持ち出す説が、弁論家には受け入れられないという点はすでに触れた。ここでは結婚は家同士の結び付きという観点で捉えられ、したがって家長や男子の家族の意向を前提的に重視する。これはギリシア世界の社会的事実に根ざす論拠である。これに対する上記サッポーの意見は、ある意味ではフェミニズム的とも言え、たいていのギリシア人男性には受け入れがたい独特の論法である。さらに、王族同士の結合としての結婚は政治的含みと関連してくる。そして本篇全般で、人物たちの行動や判断の動機として重視されるのは、政治的動機である。伝承でメネラオスが選ばれるのは、その富のゆえであるが、その伝で行けば、小アジアからの移住者メネラオスよりも、豊かな国トロイアの王子である自分のほうが富でも権勢でも上を行くはずだ (50)。そのような趣旨でパリスが自己アピールすると、

> こういう言葉を受けテュンダレオスは、息子たちと協議した。そして考えてみると、アジアの王族を（姻戚に）加えるのは悪くはないと思われた。すで

に、アガメムノンの妻として、クリュタイメストラは、ペロプス一族の家をおさえている。今後は、プリアモスと姻戚関係になれば、かしこ(アジア)の権力を握ることになり、そうすれば、彼ら(テュンダレオス一族)がアジアとヨーロッパの全てを支配することを誰も阻止できないことになる、と。(51)

パリスの男らしさも評価して（73)、とも言われているが、それは別として、現実政治的な思惑や目論見という動機がここで論拠にされている。

このようにしてパリスが婿に選ばれ、ヘレネをつれて帰ると、プリアモスやヘクトルらトロイア人たちは、こぞって、祝賀とともに迎え入れたという（53)。以上のフィクション的構築はなかなかよくできていると認められるであろう。

(c)-7 戦争の発端

では、その後でトロイア遠征はなぜ起きたのか？ 戦争の真の発端というこの点も、基本的に、政治的な動機や心理の観点から説明される。メネラオスはこの展開に当然不快を覚えたが、

アガメムノンは、彼（メネラオス）のことを気にかけるというよりは、アレクサンドロス（パリス）を恐れた。結婚を通じてつながりのできたギリシアの政治に、彼が介入してくるのではないかと疑ったのである。(62)

現実の政治を恐怖感が動かすというここの心理的根拠（証拠としての動機）については、ペロポネソス戦争を記すトゥキュディデスが、ペルシア戦後、デロス同盟を通じてアテナイが強大になってきたことに対するスパルタの恐怖感が戦争の遠因であると述べているのを聴衆は想起しえただろう。そしてアガメムノンはギリシア人たちを煽り立てる。

そこで（アガメムノンは）ギリシアの他の求婚者たちを呼び集めて言うには、彼らはみな虚仮にされ、ギリシアは見下された、いちばん優れた女性が蛮夷のもとへ嫁に出されて行った、あたかもここにはふさわしい男が一人もいないというかのように、と。こう言いながら彼は、……全ての責任はアレクサンドロスとプリアモスにある、と言って、トロイアへ一緒に軍を進めようと呼びかけた。皆が力をあわせれば、陥落させる見込みは大きい、そうなれば

彼らは多くの財産を奪い、きわめて優れた国を手に入れることになるだろう。トロイアはあらゆる市の中でもっとも豊かであるし、人間のほうは贅沢のゆえに堕落しているのだ、また自分は、ペロプスの子孫の親族をアジアにたくさん持っている、プリアモスを憎んでいるから協力してくれるだろう、と。これを聞いて、ある者はこの件を真にギリシアへの侮辱であると憤ったが、またある者は出兵によって利益が得られるだろうと期待した。アジアは財に充ちた、富のあふれる国と思われていたからである。もし彼らが、ヘレネへの求婚においてメネラオスに敗れていたなら、気にはしなかっただろう、むしろ逆に彼を祝賀したはずである。しかし今の場合は、皆がアレクサンドロスを憎んでいた。めいめいが、結婚の相手を奪われたと思っていたのである。かくて出兵が決ま（った）。(62-64)

ここではアガメムノンを含むギリシア人たちの性格描写が行われる。弁論術の用語でいう性格造型（エートポイイアー）も、議論をそれだけもっともらしく見せ補強するための証拠ないし論証手段に属する。アガメムノンは、やはりトゥキュディデスの歴史書などとの関連で、クレオンのような好戦的なデマゴーグとして性格造型されていると言える。トロイアへの恐怖心はここでは隠し、贅沢のゆえにその人間は堕落していると貶める一方で、ギリシア人の傷つけられた名誉感を刺激し、トロイアの富を強調して彼らの欲を煽り立てる。そして彼のアジ演説に、ギリシア人たちは皆乗せられてしまう。トゥキュディデスの作品においても、フィクション的演説は、「この人物はこのときこういったであろう」という推測的復元に依拠しながら、適時挿入されている。そして大衆操作的な成り行きを記すディオンのここのフィクションは、トゥキュディデス的な事例を論拠にしようとしている。もちろん、ペロポネソス戦争時代のアテナイ民主主義下での政治的社会的現象を、トロイア戦争時の出来事に当てはめようとすること自体はアナクロニズム的になるが、人間の本質は変わらないという理解の下に古典（トゥキュディデス）をそのように応用するのは、むしろ、伝承（トロイア戦伝説）に対する新鮮な視点を提示するものと受け止められ得ただろう。

以上、戦争の発端に関するホメロス反駁と新説提示とについて、主な箇所を選んで検証した。もちろん人によって受け止め方はいろいろあり得るだろうが、ホメロス反駁の論理性や、新説の論証においてそれなりのもっともらしさを成

し遂げていると評価できよう。そしてこの大胆な新説の提示においてフィクションの要素が大きな役割を果たしていることは、当然初めから予想されることであるが、すでに戦争発端論の点だけでも十分に確認された。

(c)-8 戦争の結末について

では、途中の部分は飛ばして、トロイア戦争の結末に関する議論を見ることにしよう。ホメロスの叙述や伝承全般において、後日談は別として、戦争そのものは市の陥落で終わる。しかしその前に、アキレウスの戦死という大事件がある（映画『トロイ』では彼は陥落時まで生きていることにされているが、これはおそらく主役俳優に配慮した伝説変更だろう）。したがって彼が直接トロイア陥落に関係したわけではないが、最強の勇士として、それまでトロイア側に多大な被害を与え続けた。とくにトロイアの守護者というべきヘクトルをアキレウスは倒すのである。だから、トロイアの命運にとってアキレウスとヘクトル両者が重要な役割を果たしている。そして本篇では、両者間の運命が逆転されるのである。

(c)-9 ヘクトルの強さ

ディオンはまず、ホメロス自身の叙述において、ヘクトルの強さが浮き彫りにされること、そしてアキレウスの力がそれほど目覚しいようには描かれないことを指摘しようとする。

> 詩人は、ヘクトルの活躍を隠蔽することはできない。勝ち進みつつ敵軍を船まで追い詰める彼の姿に、主だったギリシア人の誰もが震え上がる。あるときは彼をアレスに喩え、あるときはその力を炎になぞらえて記述する。その勢いを誰もこらえることはできない。(84)

これは、ホメロスの詩において、トロイア側が一時優勢になり、ギリシア軍の船陣に迫ってきたときのことを言う。ヘクトルの強さについてはホメロスは、不本意ながら、例えば以下のように事実を記していると言う。

> （攻撃するヘクトルの前に）イドメネウスも、アガメムノンも、二人のアイアスもとどまろうとはしなかった、……とうとう、(ギリシア船陣の)濠は乗

り越えられ、船陣は攻囲され、ヘクトルによって(防壁の)門は破られ、……アイアスが船の上から戦うが、最後にヘクトルに追い払われて退却し、いくつかの船が焼かれてしまう……。(88-89)

(c)-10 アキレウスはそれほどの勇士ではない

他方、アキレウスに関するホメロスの叙述や伝承を見ると、彼が最強の勇士だという定評は果たして正しいと言えるか、という問いをディオンは投げかけようとする。自軍の船陣に追い込まれたギリシア軍が危機的状況に陥ったとき、ホメロスの叙述では、まず、アキレウスの朋友パトロクロスが彼の武具を借り受けた上で戦場に現れ、トロイア軍を押し戻すものの、戦闘中にヘクトルに討たれる、ふたたびトロイア軍がギリシア陣地に迫ると、それまで引きこもっていたアキレウスが再登場してトロイア軍を撃退し、ヘクトルを殺す、という展開になる。アキレウスと重なる側面を示すこのパトロクロスは、詩人によってアキレウスの代替として創られた人物だとディオンは論じるが[15]、その点はともかく、アキレウスがそのようにギリシア軍の窮地を土壇場で救うという展開について、ディオンはこう言う。

いったいどんな戦力の持ち主がいま立ち現れて、すでに破滅している者たちを救けることができただろう？ そのような力を持つどういう不敵の神的能力を持つ男が残っていただろう？ なぜなら、(アキレウス指揮下の) ミュルミドネスの兵力は、全体の軍勢に比べればたいしたものではなかったし、アキレウスにしてからが、そのとき初めて戦うわけではなく、それ以前の長い年月において何度も戦闘を行なったのだが、ヘクトルを殺すわけでもなく、他の立派な功績を挙げるのでもない、ただ少年トロイロスをあやめただけ、というありさまだったのだから。(91)

『イリアス』は、すでに戦争が始まってから一〇年目の諸事件を主に扱っている。アキレウスがそれほど圧倒的な勇者だったと言いたいのなら、それまでに彼が、ヘクトルら主だった者たちをみすみす生き延びさせているのはなぜなのか？ それまでの彼の武勇として謳われるのは、まだ二十歳にも達していない王子トロイロスを――しかも待ち伏せして彼の不意を襲った上で――残酷に殺したことくらいである。アイネイアスにも襲撃を仕掛けたが、逃げられている。

あるホメロス外の伝承では、アキレウスのあまりもの強さに恐れたトロイア人たちが城内に閉じこもって戦場に打って出てこようとはしなかったので、それだけ長引いたのだと説明されるが、この点についてもディオンは、ホメロス自身はむしろ、トロイア人がかなり自由に城外まで出入りし、また外国との交流も続けていたことを証言する記述をしているという点を指摘する。この点でも、論敵ホメロスのテキストに見いだされる、論敵自身の「証言」を証拠に出しながら、反駁しているわけである。

(c)-11 ヘクトルがアキレウスを倒す

今引用した箇所で、「そのような力を持つどういう不敵の神的能力を持つ男が残っていただろう？」と言われていた。かりにホメロスに弁明させるとすれば、まさしくアキレウスは女神テティスを母として持つ神的英雄なのだ、という抗弁が詩人の口から返ってくるであろう。しかし、合理的論拠を重んじる裁判的弁論においては、超合理的な要素や、超常現象的経緯は、説明の論拠として排除される。しかも、かりに詩的な自由という観点からそういう創作手段を認めるとしても、そういう超自然的要素の利用の仕方が、ご都合主義的に偏っていると思わせるところもある。たとえば、ヘクトルとの対決においてアキレウスはアテナ女神に援助されるが、ヘクトルには神助は恵まれない。いや、アキレウスを保護するアテナが、他方ではヘクトルの弟に化けて彼を騙すという展開になるので、二倍のハンディキャップがそこには設けられる。もしも、そういう不公平な神の介入なしに戦闘がなされれば、その結果はどうなったか分からないではないかとわれわれ読者にも感じさせるような叙述になっている。そういう超自然的道具立ては抜きにしたらどうなるか？そのような前提でディオンは論を進める。

閉じこもっていたアキレウスが再登場していったんトロイア軍を押し戻してゆく、という事件経緯はホメロスの記述通りにされる。しばらくの間英雄は目覚しい活躍を行う。それからディオンのフィクションが導入される。

> ヘクトルは、この間、時機をうかがっていた。戦闘のタイミングを計る経験を積んでおり、アキレウスが元気いっぱいで勢い盛んな間は彼とは手合わせせず、他の者たちを励ますだけだった。しかし彼がもう疲れてきてそれまでの気勢がだいぶ落ちてきたのに気づくと――戦闘で彼は自分の力を抑えな

かったし、増水した河を無鉄砲に渡ろうとして疲れてしまったし、パイオンの子アステロパイオスには傷つけられ、アイネイアスが彼に立ち向かって長いこと戦い、その気になったとき無事に立ち去っていったし、アゲノルを追いかけ始めたが、誰よりも足が速いという評判でこの点では傑出していたはずなのに彼を捕まえられず――こういうもろもろの理由から彼が、戦いに長けたヘクトルにとって倒しやすい相手になっていることは明らかだった。それで、自信をもって戦場の真ん中で彼に立ち向かったのである。(95-96)

「時機をうかがっていた」といった点は、パトロクロスの死に関係するホメロスの描写を参考にしているだろうが、訳文の両ダッシュの中にある諸点は、アキレウスその人についてのホメロスの叙述に基づいている。アキレウスは、戦闘で力を抑えなかった、つまり、まず増水した河をむりやり渡ろうとした。これは『イリアス』第二一巻「河畔での戦い」での、英雄とスカマンドロス河との小競り合いを記す箇所によっている。すなわち、第二〇巻「神々の戦闘」で導入される主題につらなるエピソードであり、その後で、この河と、火を武器とするヘパイストス神との闘いなど、神々同士の本当の戦闘に進むのであるが、超人的アキレウスと河との戦いはその先触れである。河の擬人化は一般に詩ではよく行われるが、ここのホメロスの箇所では、トロイア側に加担する河の神が、大きな波を逆巻きにしてアキレウスを阻もうとする様子が描かれる。それは要するに、「増水した河を無鉄砲に渡ろうと」したということだと合理化するのである。総じて「神々の戦闘」は、本篇の第二部でも触れられているように、古来、あまりにも馬鹿げていると批判されてきた話である。人々は、それを、ホメロスのテキストそのままでは読まずに、アレゴリー解釈を施したり、合理化して書き直したりした。ここのディオンの書き直しも、当時の聴衆には受け入れやすい方法である。

また、アステロパイオスという勇士に槍で手首を傷つけられたということもホメロスは述べている。他の伝承で、アキレウスを不死身の英雄とする場合があるが、『イリアス』の描写ではそのように、他の人間同様血を流しうる人物であり、その点にディオンはここで注意を喚起するのである。

アイネイアスやアゲノルとの闘いでは、ホメロスの叙述においては神々の介入がある。前者はアプロディテに救い出され、後者はアポロンに守護される。そういう超自然的要素を排除し合理化して、人間同士の争いということだけに

還元すると、ディオンのここの記述のように、アキレウスは不首尾な戦いを続けたということになり、疲労が蓄積されるだけという結果になる。

そのようにして疲れきったアキレウスをヘクトルは倒したとディオンは言う。この主張は、ホメロス等の全ての伝承に対立する大胆なフィクションであるが、上記のように、ホメロス自身の記述に基づきつつ、それを「修正」しながら、ある程度論理的な帰結として導き出されたものということができる。そのような蓋然性ある推論的論証として、「トロイア陥落せず」という中心主題を証明する有力な手段になるのである。

(c)-12 戦争の終結――換骨奪胎のフィクション

アキレウスを倒したトロイア軍は、勝利に向かって大きく歩を進めたことになる。上記のようにアキレウスのヘクトルによる戦死という新説では、ホメロスにおいてパトロクロスがアキレウスの代替にされているというディオンの主張から窺われるように、パトロクロスの死に関する詩人の描写をある程度参考にすることが出来た。しかし、「トロイア勝利」という完全な伝承転倒を目指すこの後の、いよいよ戦争終結に向かう展開においては、かなり自由なフィクションがこれまでより多く駆使される。その発想の由来を伝承の中に推測的に求めうる場合もある。しかしここでは、自由な発想に基づくそれらの新しい組み合わせ方、組み換えが特徴となる。この辺りにおいては、ディオンが有するロマンス（小説）作家としての才能が寄与している。もちろん反駁的議論も折に触れ持ち出され、フィクション的な「論証」と組み合わされる。

(c)-13 停戦協定

「ほとんど滅ぼされそうになった」(112) ギリシア軍は、捕虜や持ち物をそこにたくさん残して、夜の間にこっそり船出し、トロイア対岸のケルソネソス半島にいったん逃れた。そこから帰国することを考えたが、トロイア軍が追撃してギリシア本国を襲うかもしれない、という恐れから、むしろ、適当に略奪を繰り返しながら、相手の嫌気を誘って講和を結ぶ気持ちにさせようと決め、そのように実行した。それから、ネオプトレモスら新手の、しかし「非力な援助たち」(115) が加わり、少し元気を取り戻した彼らは、ふたたびトロイアに戻り、二つ目の小さな防壁を築いてから、「やる気があるかどうか分からないような仕方で、本心は帰国するほうにあるという」(116) 戦い方を続けたという。

ケルソネソスは、ギリシア軍で最初に戦死したプロテシラオスが埋葬された場所でもあり、トロイア軍の手があまり伸びてこないところと言えるので、そこへの退却はありえる設定である（トゥキュディデス 1. 11 参照）。他方、ギリシア軍がいったんよそへ退却した、持ち物をいっぱい残していった、その後舞い戻ったという叙述は、伝承での、木馬の策に関係する一連の行動を思わせる。帰国すると見せかけて海岸にたくさんの物を逃亡の証拠のように残しておき、沖に浮かぶテネドス島の影に潜んだ、その後、木馬が市中へ引き入れられたのと歩調を合わせてトロイアに戻り、攻め込んだ、というのが、伝承に基づくギリシア軍の行動である。本篇の説では、もちろん、あたふたと逃げていったのでそこに物を置いていったのであり、奥深い計略からしているわけではない。しかし、トロイア側の嫌気を誘うための（待ち伏せや奇襲攻撃の）戦法を続けるというずるさは、伝承中のギリシア軍の狡猾な計画に対応すると言える。そういうギリシア人の性格造型を含め、ここでは、伝承素材の換骨奪胎によるフィクションを示している。つまり、素材自体はすでに聴衆に聞き覚えがあり、その点では受け入れられやすいものが含まれるが、他方では、それらの組み合わせ方が新鮮、独特で、事件展開の方向は伝承と大きく異なってくる。本篇におけるフィクションを、大胆に新しい形の下に提示しながら、しかもそれをそれだけ無理なく、もっともらしく見せる仕掛けである。

その後、パリスがピロクテテスに射殺されるというように、ほぼ伝承に沿った経緯で戦は展開し、プリアモスが王子の死に落胆してトロイア側の心も軟化し、けっきょく講和に歩み寄る。

(c)-14 木馬の伝承の修正

オデュッセウスの考案による木馬の計略で、明らかに奇妙なのは、その腹の中に多くのギリシア兵が隠れていたのにけっきょくそのまま市内に引き入れられてしまった、という点である。ディオンは、「ギリシア全軍が」そこに潜んでいたのに（125）、と人数的には誇張して言っているが、いずれにしても少ない数ではなかった。

人数を含めてそういう伝承を「馬鹿げている」（125）と笑うディオンであるが、木馬の言い伝え自体を否定してはいない。しかしディオンは伝承を修正しようとする。オデュッセウスは、賠償金を支払えというヘクトルからの要求に対しては、もともと貧乏なギリシア人にはそんな金はないと笑い飛ばしたが、

それに代わる案を申し出た。

しかし（とオデュッセウスは言う）……自分たちは、女神アテナのために美しく大きな奉納物(木馬)をここに残そう、そしてその上に

トロイアのアテナへ、ギリシア人より、宥めの供物として

と記しておこう。これはトロイア人には大きな名誉をもたらし、自分たちにとっては敗北の証になるものだ、と。(121)

これが了解され、「巨大な製造物」がギリシア人から贈られたが、

トロイア人はそれを……門から入れられなかったので城壁の一部を取り壊した。それで、市がこの馬によって陥落したという笑うべき話が行われるようになった（123）

のだという。このようにして、木馬の伝承を、後代の誤解による発展という形で説明する。なお、伝承において、城壁の破壊はギリシア軍のなだれ込みを可能にしている。

(c)-15 帰国談をめぐる矛盾点の指摘

ホメロス等が伝える伝承では、勝利をおさめた後、帰国するためトロイアを船出したギリシア人たちの多くが順調には帰れず、むしろ多くの者が散々な目にあった。この点をディオンは突く。

誰もが……こう言っている。ギリシア人はもう冬になってからアジア（トロイア）から出航した、そしてこのため軍の大部分がエウボイア（ギリシア本土東方の島）の周辺で失われた、と。さらに、全員が同じ航路を行ったわけではない、軍の間に、またアガメムノンとメネラオス兄弟の間に、不和が生じたので、或る者は前者に、或る者は後者について行き、また別の部隊は独自に出発した、と。……理から言えば、成功をおさめている者たちは互いに心を同じくし、王にはできるだけ忠誠を尽くすものであるし、メネラオスも、

兄から恩恵を受けた直後に彼に盾突くこともしないはずである。逆に、負けて苦境にある者たちには、そういうこと（内紛）が必然的に起きるものなのである。さらに、恐怖のあまり敵地から逃げ出す者は、できるだけ早く立ち去るものであり、留まり続けて危険を招かないようにする。逆に勝者となり、自分たちの所有物に加えそのように多くの捕虜や財物を得た者は、敵地を支配して全てを豊富に手中にしているのだから、安全な時季になるまでじっと待つはずである……。また、帰国した者たちを襲った禍も、彼らの挫折と非力を明らかにしている。人は、羽振りのよい勝者たちには手を出さないものだ。……一方、失敗者に対しては……軽侮を抱くのである。アガメムノンが、敗北によって、妻から見下されていたことは明らかであり、（妻の不義相手）アイギストスが、彼を襲ってやすやすと勝利をおさめたのもそのせいである。（アガメムノンの領地）アルゴスの民が、ことの収拾に当たり、アイギストスを王に指名したのもそうである。もしアガメムノンが、言われるほどの名声と権力とともにアジアの征服者として帰国したのであれば、人々は、彼を殺したアイギストスをそうは扱わなかったであろう。(130-132)

ギリシア人たちが、（わざわざ気候不順の）冬になってから船出した、というのは、伝承によると、帰国途上で彼らが嵐に遭って、小アイアスは溺死するし、オデュッセウスらは放浪を余儀なくされるという点から帰結される出航時期を指す。ホメロス等では、彼らの不幸はアテナやポセイドンの怒りのせいだとするわけであり、神の力なら、夏のより穏和な天候のときでも突然嵐は起こりえたはずだが――じっさい古代の学者は、陥落を初夏（タルゲリオン＝五月）とすることが多かった――、上記のように弁論術においては超自然的論理は排除される。多くの者がそのように嵐に遭ったというのであれば、彼らは好きこのんで冬季に船出した、という推論が可能になる。陥落は初冬（11 月）という説もあったらしいので（アイスキュロス『アガメムノン』826 古注参照）、ディオンはこれに従っているのだろう。そうすると――とディオンは鋭く突く――、勝利を収めたという者たちが、なぜそのような悪条件下で慌てたように出発するのか、「敵地を支配して全てを豊富に手中にしているのだから、安全な時季になるまでじっと待つ」のが、本来の行動であるべきではないか、と。

無事帰国した者たちを待っていた悲劇的運命に関する反駁もなかなか強烈であるが、一つ一つの論を取り上げていると詳しくなりすぎるのでこれくらい

に止めよう。

(c)-16 トロイアの栄光

戦後トロイアは、ますます盛んになり、各地に植民を派遣した。なかんずくアイネイアスが大々的な植民団を率いてイタリアに移り、ローマを築いた。プリアモスやヘクトルは、かの地の王として命を全うした。他方ギリシア人はドリス族によって追い出され、プリアモスの子孫のところに逃れてきた。

(d) 第四部（結部）　ギリシア人の名誉

このように、半分は史実的に、半分はフィクション的に自分の説を締めくくった後、最後の結部でディオンは、アガメムノンがトロイア王女カッサンドラを連れ帰ったため故国で妻に謀殺されるといった話の数々は、反駁されたほうが、ギリシア人の名誉にもなるのだと言って、この弁論を閉じる。

Ⅲ　作品論――弁論術から歴史フィクションへ

(1) 『トロイア陥落せず』の特異性

(1)-1 ホメロスに対するアンビバレントな評価の伝統

トロイア戦争異説のジャンルに属する作品の多くがそうであるように、本篇も、ホメロスに対する挑戦を試みつつ、詩人の叙述に反論したり、修正を加えようと試みる。それは他ならぬホメロスの絶大な権威が基になっている。

ホメロスの叙事詩は、トロイア戦争の伝承に関する知識のみならず、広い意味での教養一般に関しても、たとえばディオンの本領たる弁論術の分野においても、模範と仰がれた。弁論の上達のためにはどのような古典作家を研究すべきかという教示を行う『弁論の修行について』という題の第 18 篇で、ディオンは、とりわけホメロスの勉強を奨めながらこう言っている。

> ホメロスは、子供にも壮年の者にも、老人にとっても、初めであり、中間であり、終わりである。一人ひとり（の読者）が、（年齢に応じて）受け取りうるだけのもの（教養的な糧）を詩人は自分からの贈り物とする。(18・8)

これはもっぱら弁論的あるいは文学的教養の点から言われているが、『ホメロ

スについて』と題されている第 53 篇では、

> 詩人が書き記している事柄は、有益で役に立つものばかりなので、徳と悪徳に関する彼の詩句を詳しく論じてゆけば、たいへんな仕事になる（53・11）

という言葉で、道徳的な観点からもホメロスの詩から学べることがたくさんあると述べる。そしてそれに続く箇所で、「善き王」とその模範たる神々の王ゼウスに関する詩人の発言に言及しながら、王たる者は、「人間と神々の父」ゼウスのように、父親のように親身な心で人々のことを顧慮しなければならないとホメロスは言っている、としている。「善き王」に関する有益な教えがホメロスにあるというこの見方は、『王政について、その一』という、トラヤヌス皇帝に向けて話されたと推測される弁論（第一篇）でも踏まえられている（1・9 以下）。

さらに注目すべきは、『ホメロスとソクラテス』という作品（第 55 篇）である。ここでは、ソクラテスをホメロスの「弟子」と呼んで、両者の叙述の主意に共通性を認めようとする。

> ホメロスが神話や史談（ヒストリアイ）を通じて、とても教育しにくい人々を教えようと企てたように（55・11）

ソクラテスが、話の中で、大方の人間には把握しがたい抽象的議論をする代わりに、実在人物を具体的に登場させたのも、同様の目的だったのだ、と言う。ソクラテスが、例えばはったり屋を登場させるときは、はったりのことについて論じるためだったのだ、などと説くディオンは、他方で、ホメロスの叙述において、例えばアシオスというトロイア人が、自分の力を恃み、将軍の命令を聞かずにギリシア陣地に深入りして命を落とした個所（『イリアス』12・110 以下）を引きながら、ここで詩人は不服従とはったりのことについて語ろうとしている、などと述べ、ソクラテスはそういう点をホメロスから学んでいるのだと言う。こういう道徳的アレゴリーの観点から両者を「師弟」の間柄とする見方は、後代にネオプラトニストたちが、ホメロスの詩とプラトニズムとの間の敵対関係を、アレゴリー的な解釈によって融和させようとした試みの、一つの先蹤になっているといえる。

しかし、他方では、ホメロスの作品において古来人々がもっとも非難してき

た点である神々の行動の描写については、ディオンもあえて弁護を試みようとはしない。この神学的観点からのホメロス批判者として、『国家』におけるプラトンが有名であるが、ディオンは『ホメロスについて』でそれに言及して、

> プラトンは、……神々に関する（ホメロスの）神話や叙述においてはしばしば非難の声を上げている。人々にとってけっして為にならないこと……つまり、神々の貪欲な行為や、互いに対する陰謀、密通、争いや、喧嘩好きなことを彼は叙述している、というのである（53・2）

と述べている。ディオン自身も、オリュンポスの上での神々の情交などに批判的に言及する（12・62 参照）。神々同士の戦いなどの描写は、誰から見ても理解しがたいと思われた。そこで或る人々は、上記のように、自然学的なアレゴリーの読み方でホメロスを擁護しようとしたが、ストア派において比較的よく採用されたこの方法に、ストア的な面も持つディオンはあまり積極的には従おうとしない。『ホメロスについて』でこう言っている。

> こういう点（神々の好ましからざる行動や冥界の陰鬱さに関すること）についてホメロスは（プラトンの言うように）過ちを犯したのか、それとも彼の神話の中には自然学的な説が含まれていて、それを当時の慣わしに従って人々に(アレゴリーを通じて)伝えようとしたのか、という議論……は、判定を下しがたい性質のものである。ちょうど、わたしの思うに、二人の友人が、両方とも重きを置かれている人物であるが、互いにやり合っているとき、片一方に負けを宣することが容易ではないようなものである。(53・3)

このように述べて、そういう叙述に関するアレゴリー的な読み方に組みするか、プラトン的なホメロス批判に賛同するかどうか、あいまいな態度を示している。

ホメロスに対するアンビバレントな態度は、すでにプラトンにおいても認められる現象である。これにディオンは触れて、

> プラトンは……詩人を批判するとともに、その詩作の力が讃嘆に価することも示している。あらゆる事柄を写す能力を彼は持ち、河や風や波といったものの音声を、それがどんなものであっても、表してしまう詩人だ、というの

である。そして、とても皮肉な言い方で、彼の頭を羊毛の紐で巻き、香油を注ぎかけて(顕彰して)から、他の土地へ追い出すべきだと命じる。(53・5)

ホメロスに対するそのようなアンビバレントな見方は、古くからの伝統的なものであり、それをディオンも継承している。

(1)-2 弁論の文脈に応じた評価の相違

古来ホメロスは、ヘシオドスとよく比較される。オリュンピアのゼウス像を主題にするディオン第 12 篇『オリュンピアのゼウス像と神の観念――詩と彫刻の比較――』では、トロイアで戦う男たちのことを歌ったホメロスと、偉大なゼウスの力を称えたヘシオドスという観点から両者を比べながら、『ホメロスとヘシオドスの歌競べ』におけるように、ヘシオドスのほうがホメロスよりも上と判定している（12・23～24)。ところが、トラヤヌス皇帝を相手に、王政のありかたについて論じる第 2 篇では、作中の若きアレクサンドロス王の視点から、ホメロスの詩は王者にふさわしいが、ヘシオドスのそれは羊飼いや農民のためのものであるとして、前者のほうが評価されている（2・6～8)。

このような判定の齟齬と見えるものは、ディオンが、一種無責任に、好き勝手に、発言の趣旨をころころ変えているということを意味してはいない。ホメロスの詩的力量は、第 12 篇でも、充分に評価されている。この点では、ギリシア人の意見はほぼ一致している。他方、上記のように、ホメロスに対する伝統的な批判は、とくにその作品に神々への侮辱的要素が見られると感じられたからである。神々は人間にとって一種の模範と見なされたから、ホメロスの作品への神学的な批判は、道徳的な意味合いをも帯び得る。神学的関連性がない場合でも、一般に道徳的な種類の評価は、とくにどの観点から見るかに応じて、変化し得る。

第 12 篇では、その「大部分が愚か者であった彼ら」(12・23）という言い方で、ホメロスによって描かれたトロイアにおける戦士たちに厳しい表現が適用されている。この第 12 篇では、ダキア（およそ今日のルーマニア）における現地民とローマ軍との激しい戦争を目撃してきたディオンが、いまギリシアのオリュンピアに帰ってきて、いわゆる「神の平和（エケケイリアー)」の下、オリュンピアに集った人々やエリス人に向かって、ペイディアス作の有名なゼウス像を前にしながら、この偉大な像の崇高な姿を讃えようとしている。そして、

この大神をめぐるホメロスとペイディアスの描写を比較しながら以下のように言う。なお、ペイディアス自身の口から語られる「プロソーポポイアー（活喩法)」という形式を取っている。

> 最高に賢明な詩人ホメロスよ、詩作の力においても、年代(の古さ)においても、ずっと他を凌駕しているお人よ。他の神々全てを、そして至大の神(ゼウス)を表す数多くの美しい像を、ギリシア人たちに対して示したのは、あなたが最初であると言ってよい。それらの像には、穏和なものもあるが、慄然とさせる恐ろしいものもある。しかしわれわれの像のほうは平和的であり、あらゆる面において柔和である。それは、ギリシアが、内紛に陥らずに協和していられるよう監視する神にふさわしい。わたしが…据えたこの像は…穏和であり、憂いを示さぬ姿態の中で荘厳な様子を保っている。命の糧と生命とあらゆる恵みとの授与者、人類に共通する父にして、救い主でもあり守護者でもある方をそれは表している。(12・73～4)

また別の個所でも、ホメロスにおいてゼウスは、

> 暗色の（雲の中に立つ）虹を戦の兆しとして空に架ける神、絶えず火花を散らしつつ進む星（彗星）を送り出し、船乗りや兵士たちにとって恐ろしい前兆にする神、あるいは、ギリシア人と異国人に辛い戦闘を引き起こし、休みのない労苦に（すでに）疲れきっている人々を、戦と戦闘への欲求によって煽り立てる神（12・78)

として描かれていると言う。そのように「恐ろしい」面を持つゼウス、戦争へ煽り立てるホメロス的な大神に対して、ペイディアス作のゼウス像は、「平和的」であり、「柔和」であって、ギリシアが「協和」しているよう見張る神、「救い主」にして「守護者」であると言う。

しかしホメロスのゼウス像は、他方では、「善き王」の模範とされることがある。そして、理想的な王は平和的であり、親しい者たちには父のように慕われる一方、敵対する者たちには、その威厳によって畏怖を与える存在である。善き王には、戦の準備も充分整っている。トラヤヌス帝に向けて語られた『王政について、その一』（第１篇）で、

敵は彼（善き王）を恐れ、自分が彼に対する敵であると認める者は誰もいない（1・25）

と敵の恐怖について述べられる一方、王自身は

戦闘的でもあり、自ら戦を舵取りするほどだが、また、平和を享受しており、戦いを仕掛けるに価するものは何も残っていないほどである。戦の備えをいちばんよくしている者が、いちばん平和に時を過ごせるのだということを彼は知っている（1・27）

のであるという。そして、この第１篇では、善き王の象徴としてヘラクレスが用いられているが、敵に対する彼の態度についてこう言われている。

彼は大地と人間の救い主である。それは、彼が野獣を駆逐したからではない――ライオンや猪がどれほどの害をなすだろう――、むしろ彼が、野蛮な邪悪な人間たちを懲らしめて暴君の権力を挫き、取り除いたからなのである。（1・84）

上記の、ホメロスに関する判定の相違が、それぞれの弁論が行われた「文脈」の状況に由来することは明らかである。

(1)-3 『トロイア陥落せず』の特異性――追放前のディオンの作か

したがって、たとえば『ホメロスについて』では詩人に対して称賛的な言葉が費やされるのに、『トロイア陥落せず』では厳しい論難がなされるのは、伝統的なホメロス評価においてもともとアンビバレント性が認められるという状況の下、弁論の文脈に応じて現れた作品特徴と見なすことは、それ自体では可能である。『トロイア陥落せず』の文脈は、この場合、ディオン自身が、本弁論を「トロイア人の名誉のために」行うと述べている点に求められる。トロイアその地で口演された弁論なのである。

しかし、それにしても、一種口を極めて詩人を非難するこの演説は、ディオンの他の作品におけるホメロス批評と考え合わせて、いくぶん特異に過ぎると

いう感を我々は抱かざるを得ない。なるほど、ホメロスへの批判は伝統的であり、ディオンもそれにならう場合がある。しかし、ディオンが引用しているように、プラトンが詩人を「追放」しようとするときも、ホメロスの詩才への敬意を充分払いつつ――「彼の頭を羊毛の紐で巻き、香油を注ぎかけて（顕彰して）から」――そうするのであり、ディオン自身が、ペイディアスのゼウス像と比べてホメロスのそれに瑕疵を見る場合も、「最高に賢明な……、詩作の力において……ずっと他を凌駕している」詩人であることを前提的に述べながら、そうするのである。

ところが本篇では、そもそもホメロスに対する敬意がいわば地に投げ捨てられる感がある。

> とてもひどい嘘を皆さんに対してついたホメロス（11・4）

と冒頭付近から唱えるディオンは、ホメロス批評の伝統では多くは神学的な観点から行われてきた道徳的な趣旨の非難を、ここでは、内容よりもむしろ叙述の態度や方法そのものに向ける。裁判議論的な性格を持つ本篇では、ホメロスの叙述法にとくに攻撃の照準が向けられるからである。詩人の能力への「敬意」は、今は、虚偽の叙述を悪びれずに試みる大胆さや、詩的ソフィズムに対して、否定的な意味で、払われる。

> あらゆる事柄のうちで彼がいちばん躊躇わなかったのは、嘘をつくということであり、それを恥ずべきこととも思わなかった（11・19）

とか、

> 詩人は人々を見下していて、真実は何一つ語っていないと思われようとも気にはしなかった（11・21）

とか、

> 嘘に関してホメロスが誰よりも大胆な男だったということ、彼が嘘をつくことに、真実を語ることに劣らず自信を持ち、得意がっていたことをわたしは

見て取る（11・23）

とかと言い放つのである。

とはいえ、その「嘘」の能力もけっして高かったとは判定されない。その虚偽には綻びが自然と見えていると言って、詩人は

虚偽を貫くことができず、これらの点において彼の作は、彼が隠そうとした諸事実（真相）を顕してしまっている（11・33）

と言うし、ホメロス批評の伝統において非難にさらされてきた「神々の戦い」の段に属するアキレウス対スカマンドロス河神との対決などの場面（『イリアス』21・232 以下）に関して、詩人は、

アキレウスの武勇のことをまったく無能な、納得しがたい仕方で語って、あるときは彼に河と戦わせ、あるときはアポロンを脅し追跡させたりする。こういう諸々のことから、彼がほとんど叙述に窮していることが見て取れる（11・107）

というように、彼を無能呼ばわりすることも躊躇しない。ここは、上記のように、伝来の神学的道徳的な批評よりも、叙述の仕方に関する論難に向かっている一例である。

もちろん、「トロイア戦異説」の文学として、ホメロスへの挑戦という要素が最初から含まれていることに関係しているのは確かであるが、それにしても、ピロストラトスがホメロスへのオマージュは忘れないという点と比較すると、あるいはダレースの書で、戦争に自ら参戦したプリュギア人ダレースの証言と、戦後ずっと後に生まれたホメロスの記述とどちらが信用できるかという挑戦的な言葉を掲げながら（『トロイア陥落史』序）、ホメロス批評にはそれ以上とくに立ち入らないというのと比べると、差異は歴然としている。

また本篇では、「乞食」ホメロスに関する扱いをめぐって、ホメロスに対する個人攻撃も行われる。ホメロスは、盲目の乞食吟唱詩人としてあちこちを放浪したという、諸『ホメロス伝』で提示される伝承がディオンによって受け入れられているが、『ホメロスについて』ではその点も詩人の褒められるべき点に

数えられる。

> 人は、その作品よりも詩人の人柄をいっそう誉めるだろう。貧乏な生活をして放浪しつつ、生きてゆけるだけの糧を作品によって得るというのは、讃嘆すべき潔さであり、不屈の心がまえである。(53・9)

ところがそれとは逆に、本『トロイア陥落せず』では、まさにこの点がホメロスの叙述の信用し難さを補強する材料にされる。

> ホメロスは、貧乏と不如意のため、ギリシアで乞食をしていたと言われている。……今の乞食は何一つ健全なことは話さないと人々は言うし、誰しも乞食を、何についてにせよ、証人にしようとは思わないだろう。また、その褒めことばを真実として受け入れることもない。彼らが、必要に迫られて、すべてをお世辞で言っていることを人々は知っているからだ。それから人々の言うには、ホメロスに恵みを施した者は、彼を乞食として遇しもしたが、またある者は狂人として扱った、そして当時の人間は、彼のことを、嘘つきというよりもむしろ、(実は寓意的に)真実を語ってはいたのだが、狂人だとして断罪したのだ、と。……こういう論者たちが唱える意見によれば、彼が語ったことは、何一つ健全でないということになりそうである。(11・15〜16)

乞食は、周知のように、相手のご機嫌取りにどんな嘘でもつくものだから、乞食詩人ホメロスによる、ギリシア人聴衆に向けたトロイア戦叙述を――陥落その他の事件にまつわるギリシア人たちの英雄物語を――、彼らが古くから真実として尊重しているのは不合理である、という。また、この引用文の後半では、アレゴリー論者たちが、ホメロスの詩を救済しようとして、「神々の戦い」などの個所における表面的な字句の下に、哲学的な意味を読み取ろうとする方法を逆手に取る。アレゴリー(寓意)は、ギリシア語で「ヒュポノイア＝言下の意」とも言われるが、ヒュポノイアを用いる、ということは、「遠まわしに、ほのめかして言う」ということであり、「健全」ないし率直ではない、うさんくさい言論の態度を表すというのである。ここでは、したがって、上で引用したアレゴリー的方法への敬意(53・3)も認められないわけである。

以上のように、伝統的なホメロス批評から逸脱していると見られる本篇の性格、またそういう伝統に沿っている『ホメロスについて』などのディオンの他の作品における批評法と根本的に異なるように思われる要素を勘案すると、ディオン全作品における『トロイア陥落せず』の特異性は否定しがたいように思われる。『ホメロスについて』における、よりオーソドックスで穏健なホメロス観や、『オリュンピアのゼウス像と神の観念』における哲学的な思想を踏まえたホメロス批評などと比べると、本『トロイア陥落せず』は、議論に走りすぎているという感を与え、少なからぬソフィズム的な性質を示しているように思える。

上記のシュネシオスという、ディオンよりおよそ二百年後のギリシア人は、逆説的な称賛を行う――つまり常識的には讃美しがたいものを褒め称える――弁論である『虻の讃美』などのディオン作とともに、『トロイア陥落せず』を、彼の遊戯的な作品（paignia）に数え入れ、弁論技能の顕示を行う作例と見なす。しかもシュネシオスは、ドミティアヌス帝により追放処分に処せられた時期を境としてディオンの生涯を大きく二期に分け、前期はソフィスト的だった彼が、その後、苦難に充ちた追放時期を経るうちに「回心」して哲学者となったと見なしつつ、『トロイア陥落せず』などの作品を、追放前のソフィスト時代のものと考える[16]。

追放が、ディオンの精神史や弁論・著作活動において、きれいな境界線になったとするのは、もちろん割り切り過ぎである。すでにその前から彼は、ローマにおいて、ムソニウスというストア派哲学者の講筵に列しており、哲学的な思考法を深めつつあったはずである。また「遊戯」的な『虻の讃美』などの作品は、「哲学者」になったディオンでも、気晴らしに書くことがあったかもしれない。追放時期のつらい経験は、すでにある程度あった彼の哲学志向をいっそう推進したと考えるのが妥当であろう。

しかし、それでも、少なくとも『トロイア陥落せず』の理解にとっては、上記のその特異性を考えるとき、シュネシオス的な二分法は――今日の研究者には斥けられることが多いが[17]――基本的に有効であると思われるし、この作品を追放前のものとするのは蓋然性が高いと言える[18]。『オリュンピアのゼウス像と神の観念』などの他の作品でよく見られるディオン自身の老年と放浪体験への言及は、『トロイア陥落せず』ではまったく現れない。若いころの[19]、いわば血気盛んな時期の産物と称しても大過はないと思われる。

⑵ 弁論からフィクションへ

⑵-1 「ソフィスト的」弁論だから無価値か――フィクションの自律性

ホメロスを攻撃するという主題は、弁論術における伝統のひとつになっていた。とくに、「ホメロスへの鞭（論難者）Homēromastix」とあだ名されたゾイロス（前四世紀、アンピポリス出身）が、この点で有名である[20]。その噛み付くような毒舌ぶりから「弁論者的な犬（犬儒）kyōn rhētorikos」とも称されるこの人物は、一つ目巨人ポリュペモスなどを讃える逆説的称賛演説をあらわす一方、プラトンやイソクラテスら同時代人に容赦ない非難を浴びせたが、とくにホメロスの諸「欠陥」を問いただす攻撃的な批評によって後代にまで名をとどろかした（作品そのものは散逸した）。本『トロイア陥落せず』をあらわそうとするディオンにとって、部分的には、モデルになった可能性がある。

ところでゲルトナーは、ゾイロスのそういうホメロス攻撃を、ソフィスト的な、真剣ではないふざけた批評態度と見なして、アレクサンドリアの学者らの学問的なホメロス文献学と区別する[21]。そして同様にアルニムは、ディオンのこの作品に関しても、それは彼の「ソフィスト」時代のものというシュネシオスの判断に従いながら、「ソフィスト」的な「遊戯作」であるとし、かつ、文学として価値に乏しい、としている[22]。

しかし、ゾイロスの作は――散逸しているので確かなことはわからないが――もっぱらホメロスの詩の「破壊」にのみ関心があった[23]ようであるのに対し、本『トロイア陥落せず』では、そういう破壊、反駁とリンクさせながら、建設つまりディオン自身の新しい説の提示と論証にも努力が払われる。むしろこちらが主目的になっている。

ディオンのこのトロイア戦異説では、「トロイアは陥落しなかった」という主旨を中心に、きわめて大胆な歴史フィクションを構築しようとする。この大胆な説が、単なる気まぐれな思いつきと見なされないように、裁判形式を随所に用いたりしながら、できるだけ納得しうる事件（戦争）経過を、論理性、蓋然性に基づきながら、陳述、論証しようとする。ライフが述べるように、本篇においては、真実の文学的な構築に対する深い関心が示されている[24]。その特徴をより正確に言えば、弁論形式を通じた歴史フィクション（文学的真実）の建設が追求される。これは、単なる「遊戯的」で「無価値」な行為というより、むしろ文芸的に極めて興味深い試みであり、それ独自の価値を持つと言い

うる。ゴルギアスの有名な悲劇論で、

（悲劇は）ゴルギアスの言うように、物語と受難を通じて欺瞞（apatē）を提供する。そういう欺瞞を行う者は、欺瞞を行わない者よりも正しく、欺瞞を受ける者は、受けない者よりも賢い……（プルタルコス『倫理論集』348C＝ゴルギアス断片 23）

と言われているが、観客が身を任せるよう推奨されるこの「欺瞞」とは、独自性と自律性を有する劇（文学）作品の世界への没入を表すと思われる[25]。ディオンのこの歴史フィクションにおいても――その世界への聴衆の「没入」ないし満場的な賛同は、ディオン自身が予想するように、あまりにも反通念的な内容のため大きく期待はできないとしても――、「蓋然性」の連繋による伝説の再構築は、それ自体の自律的な意義を主張しうる。

(2)-2 弁論とフィクション

真実らしいフィクションという創作理論が本篇では重要な役割を果たしていると指摘される。上記のように今日のフィクションに相当する概念はすでに古代からあり、プラズマ（plasma）という用語で、歴史や神話と並べられた。プラズマは、他の文学領域とともに、弁論術の手法にも属している。フィクションと史的ないし詩的真実の関係という問題は、すでにホメロスやヘシオドスにおいて意識され、歴史家ら散文著述家（ヘロドトス等のロゴグラポイ）を経て、弁論家（ゴルギアス、イソクラテス等）、哲学者（プラトン、アリストテレス等）の議論に受け継がれてゆく。本篇は、フィクション論の歴史における重要な資料として読まれうる。

ディオンは、彼の考えではもっとも納得しうる記述を提示し、伝承の「真実」に至ろうとする。今日の考古学者が主に物的証拠に基づいて歴史の復元を試みるのとは異なっている。ホメロスの「虚偽」を弾劾するディオンの言説にも虚構性は小さくはない位置を占める。古代ギリシア人にとって、「真」と「偽」はともに言説を介して現われ出るものである。「トロイア戦争異説」のカテゴリーにおける本篇の独自性は、ロゴスにまつわる真偽の表裏一体性を認識しつつ、言説の新たな建設を通じて過去をよみがえらせようとするその言論的弁論術的試みにある。

また古くから弁論家たちによって、トロイア戦伝説関連の作品があらわされていることは言うまでもないが、この戦争全体に関して本篇ほどに大規模なフィクション的構築を大胆に行っているものはないであろう。たとえば、ゴルギアスやイソクラテスによるパラドクシカルな弁論作品は、（戦争の原因者として非難される）ヘレネの「弁護」などを試みているが、ひとつの狭い主題に限られている。

(2)-3 フィクションとしてのディオンの「真実」

より信じうる、ありそうな経緯や事件の「真相」を歴史的に究明し、また裁判的にただして明らかにしようとする作者は、一種の被告たるホメロスの叙述における「虚偽」をしばしば言い立てる。ではディオンが、それに対抗して提示する説明には虚偽性ないし虚構性はないのか。本篇の趣向の一つに、「エジプト神官」が情報源であるという設定がある（37 以下）。神官が作者に教えたと言う「真説」は、トロイア戦後エジプトに移住したメネラオスが、この戦の話を土地の者に語って聞かせた話の記録に基づいているという。絶大な歴史を誇るエジプトに叙述の権威を依拠するという、ヘロドトスにおいて見いだされる方法は、プラトンの『ティマイオス』におけるアトランティス伝説の語りにおいても採られている。こういう明らかに虚構的な仕掛けが叙述の骨組みにされている点、また語り手としてのエジプト神官と作者との区別がしばしば曖昧であること、つまり引用文なのかディオン自身の言葉なのかしばしば不分明である[26]という点を見ると、「虚偽」への批判とそれに対する「真実」の主張とがどこまで本気なのか、読者を戸惑わせる面がある。ディオン自ら、ホメロスの「虚偽」を容認するところも見せているのである（147 以下）。

トロイア戦争が、おおもとは、じっさいにあった史実であるという点を疑る古代人はいなかった。また、近代では疑われることもあるが、アキレウスやヘクトル等の代表的人物の存在自体も了承されていたと思われる（ただし、パトロクロスはホメロスの創作した人物だとディオンは言っている）。しかし個別的な点では、今日の考古学者や歴史学者が用いる物的な資料は古代人にはなく――トロイア戦争の英雄たちの巨大な「遺骨」が発見されたと称する事件はしばしば持ち上がったが――、彼らが参照できたのはもっぱら先行の文学作品や歴史記述であり、他には場合によってはローカルな伝承があった程度で、しかもそれぞれの証言の間に小さからぬ食い違いがあるのはむしろ当たり前であった。

比較的最近に起きた今次の世界大戦に関しても、重大な事件の核心に関する場合ですら、事実の認定に大幅な意見の相違があることが少なくない。したがって、新たな叙述を試みる者は、多かれ少なかれ自由に筆を進める余地を与えられていると考えることができた[27]。

トロイア戦伝説には、相反する記述や証言が充ちていて、その「真相」は曖昧模糊としている。それにより迫るためには、「虚偽」をこしらえるのと同じ目的ではないが、やはり言説を積み上げ、組み合わせて構築してゆく営みを通じてそれを再現する試みをせねばならない。ヘシオドスの前に現れたムーサたちは、

われらは知る、多くの嘘を真に似せて語るすべを、
またわれらは知る、欲するときには真実を述べることを。（『神統記』27 以下）

裁判のように相手方（ここではホメロス）の叙述の矛盾点や弱点を指摘してその根拠を切り崩す作業とともに、ホメロスの「虚偽」の代わりとして提示される「真実」は、遠い時代の伝説にかかわるのだから、同様に叙述の営みを通じて建設されねばならない。ディオンが用い得る証拠は多くは状況証拠であり、物的なものには頼れないのである[28]。近代の裁判においても、状況証拠しかなければ、言説のやり取りと論理が主たる論証の手段となる。その際、エジプト神官という仕掛けなどの虚構、フィクションは、それ自体を目的とする虚偽とは別に、伝説の「真実」にもっと近づく手段として許容される。ホメロスの叙述の虚偽性を完全に論証することはもちろん不可能であるように、ディオンの提示する説を信じさせることも、彼自身がその困難さにしばしば言及するように、期待できない。彼としては、大権威の叙述とは異なっている、いやそれとは正反対の経緯を含む大胆な新説を、合理主義の原理に基本的にのっとりつつ、できうるかぎり納得しうる形で展開して、この伝説にかかわる他の見方もあり得ることを示そうとしたと言うことができよう。

(3) フィクションと真理または現実

(3)-1 言論の「遊戯」と現実とは相容れないか？

ラウスバーグによると、演示弁論は、「芸術のための芸術」的な性質を帯び、ポエジーに近づくという[29]。これは、上記の文学（ポエジー）の自律性ということよりも、むしろ、現実的な関連性から遊離する傾向をそれは持つという

ことを言いたいらしい。

演示弁論の一例に、第一ソフィスト時代の代表者ゴルギアスによる『ヘレネ讃美』がある。ヘレネは、トロイア戦争を引き起こした張本人ということでよく非難される女性である。その彼女を讃える――ただしじっさいは弁護的な内容が主である――という、逆説的な弁論であるが、そこでこう言われている。

> わたしはこの弁論で、一女性の不名誉を取り除いた。弁論の初めに定めた法(誉むべきは誉め、非難すべきは非難する)をわたしは守った。(ヘレネへの)非難の不正義と、思い込みの無知を終わらせようとわたしは試みた。わたしが書こうとしたこの弁論は、ヘレネにとっては讃美であり、わたしにとっては遊戯である。(第 21 章)

ここの「遊戯 paignion」という言葉を、単なる不真面目な「遊び」ととれば、ラッセルが考えるようにこの弁論全体がひとつの「ゲーム」だったということになるだろう[30]。しかしヘレネは、女神としてスパルタ等において祀られていた存在でもある。また日本語で管楽の遊びなどと言うように、「遊び」の語は、不真面目なふざけた行為ばかりを表すわけではない。管楽、ムーシケーの「遊び」は、神をも喜ばすという考えは、ギリシア人にもあった。今ゴルギアスは、自分の演示弁論をムーシケーの営みになぞらえながら、それをヘレネの称揚と弁護に結び付けようとしているのではないか。

(3)-2 トロイアとローマ

言語的な「虚構」は、生の「真理」の認識に寄与しうるものであるという考えをアリストテレスは示している。

> 詩人……の仕事は、すでに起こったことを語ることではなく、起こりうることを、すなわち、ありそうな仕方で、あるいは必然的な仕方で起こる可能性のあることを、語ることである。……詩作は歴史に比べてより哲学的であり、より深い意義を持つ……詩作はむしろ普遍的なことを語り、歴史は個別的なことを語るからである。(『詩学』1451a36sqq., 松本仁助・岡道男訳)。

ここでは、文学作品が示唆する「普遍的」、哲学的な生の真理ということを肯定

的に述べながら、歴史と対比している。しかしここで言われる歴史（ヒストリアー）は、ヘロドトスのような、「個別的」事実の聞き取りや調査（ヒストリアー）を基にした研究の結果を記述したものである。それに対してディオンのこの作品では、基本的には史実と信じられていたトロイア戦争という題材を扱いながら、論理力および想像力を二大手段にして、「起こりうる（えた）こと」を、「ありそうな仕方で、あるいは必然的な仕方で起こる（きた）可能性のあること」を、構築しようとしている。蓋然性を前面に押し出す本篇でのディオンが、アリストテレスのここの理論を多かれ少なかれ念頭においていたことは間違いない。歴史フィクションを通じて得られるひとつの真理の可能性という意識がここには含まれていると見なすことができる。

さらにトロイア戦伝説は、現実のトロイア人およびその子孫とされるローマ人とも関係する。本篇の聴き手は、ディオン当時のローマ帝政期においてトロイアの地に住む人々である。もちろん、ホメロスの叙事詩で描かれる千数百年前のトロイア人と血縁的につながるかどうかは分からない。トロイアは、はるか昔から、建設、破壊、再興を繰り返してきた都市である。しかし少なくとも地縁的な点からは昔のトロイア人は彼らの精神的祖先である。またトロイアはディオンの故郷プルサにも近いので、作者にもそういう意味で親近感を覚えさせていたかもしれない。さらに、現在地中海一帯を支配するローマ人の神話的祖先は、小アジアからイタリアに移住したと伝えられるトロイア人である。「親ギリシア的」とも言われるホメロス叙述の呪縛から彼らを解放し、その名誉回復を図る試みは、このように、現実的な側面、あるいは政治的な含みも持っていたかもしれない[31]。

＊本論文は、2009 年 7 月 4 日に、美学会西部会研究会（於京都大学）で口頭発表した草稿を基にしている。発表をお聴きいただき、さらに数々の質問をお寄せいただいた美学会の方々にお礼を申し上げる。

注

(1) Cf. Dingel 866sq., Saïd, 176. 前三世紀のディオニュシオス・スキュトブラキオンによる『トロイア史 Trōika』に始まるとされる。

(2) Dares Phrygius, De Excidio Troiae Historia. ギリシア語原本の成立は紀元後 1 から 3 世紀か。

(3) Dictys Cretensis, Ephemeris Belli Troiani. その断片が残るギリシア語原本は2から3世紀の成立らしい。

(4) Philostratos: Heroikos. 3世紀の成立。

(5) Lukianos, Oneiros ē alektryōn (Gallus). 2世紀。

(6) Jones, 17.

(7) Vagnone 20 n. 37 'greco-troiani'. 古来のトロイア人の血を引くという新トロイア（イリオン）市民の主張について、ストラボン13・40参照。旧トロイアは完全に消滅したという説もあった（ストラボン 13・41)。ただし、ホメロスのトロイアと新トロイアとはもともと同一ではないという説も有力だった（ストラボン13・25等参照)。

(8) ドイツ語でGelegenheitsrede. （「機会演説」）と称されることがある。

(9) Cf. Anderson, 143.

(10) ロウブ版第V巻384ページ。

(11) Seeck 100.

(12) Cf. Seeck 105.

(13) 以上のラテン語用語は、反駁＝refutatio、立証＝probatio、論証＝arugumentatio、証拠ないし論証手段の数々＝argumenta（本篇ではsēmeion (61), tekmērion (78) と言われる)。

(14) Cf. Saïd, 181 'a knowing parody of the Aristarchean maxim'.

(15) 今日のネオアナリストたちの解釈法を先取りしている (cf. Seeck 104, Saïd 184.)。また、分析論者の『トロイア陥落せず』への関心について、Swain, 18sq. 参照（d'Aubignac)。分析論的ホメロス批評法一般と、本篇におけるホメロスの叙述の不合理性への追及について、Seeck 98, Saïd 183 参照。

(16) ロウブ版第V巻 (ed. Crosby), 384ページ。シュネシオスは、ディオンの全ての作品に、「追放前」または「追放後」という表示を付けることを提案する (374)。

(17) Vagnone, 10 n. 3.

(18) Cf. Jones, 17.

(19) Cf. Jones, 17.

(20) Cf. Gärtner, 1549sq.

(21) Gärtner, 1549.

(22) Von Arnim 204 'deren absoluter litterarischer Wert gering ist'. 本篇のさまざまな解釈法について, cf. Saïd 177; Rife, in: Potter (ed.) 473 'Modern critics

have debated whether this speech (Or. 11) functioned as literary showpiece, political propaganda, or moral polemic'.

(23) Cf. Gärtner 1550 'destruktive Feindseligkeit'（ただしそういう真剣な批判と誤解されたが、ほんとうはふざけている、とゲルトナーは見なす）。

(24) Rife 473 'it demonstrates a profound interest in the literary construction of truth. A "true" account (alêthês), as Dion defines it……is one that is "credible" (pithanos), "plausible" (eikos), and "similar to actual events" (homoios gegonosi). His definition recalls the verisimilitude of plasma'. Cf. Russell, in: Kennedy (ed.), 298.

(25) Cf. Buchheim XIX 'Apatē meint nämlich nicht die Verstellung einer im Hintergrund bleibenden Wahrheit durch unrichtige Vermittlung, sondern apatē)bringt ab vom bisherigen Weg(und entführt in eine dem Kunstinteresse gemäß gestaltete Welt'.

(26) Seeck 98.

(27) しかし歴史家は、史実の観点から、古代の神話をどのように扱うべきか、悩ませられた（ディオドロス・シクルス 4. 1, cf. Saïd, 185, n. 156）。

(28) ただしトロイア地方に散在する塚は英雄たちの実在の証拠になりえた（『トロイア陥落せず』103 章参照）。また歴史時代のトロイア（新イリオン）市内におけるアテナ神殿で、トロイア戦の勇士たちの武具と称するものが陳列されていた（ただし東征するアレクサンドロス王が自分のと取り換えた、アリアノス 1・11）。新イリオンのアクロポリスには、陥落の際にプリアモスが難を逃れたゼウス祭壇だというものが示されていた（アリアノス、同箇所）。また、イタリア・メタンポントゥム等のミネルヴァ神殿では、エペイオス（戦後イタリアに渡ったという）が木馬を製造した時の道具と称するものが陳列されていた（ユスティヌス『摘要』20・2・1, cf. Erskine 140）。これらはとりあえず「物証」として扱うこともできた。

(29) Lausberg 131 'Sowohl das virtuose Element (l'art pour l'art) als auch die Auswahl der Redegegenstände lassen das genus demonstrativum in die Nähe der Poesie rücken'.

(30) Russell, Gorgias: Encomium of Helen, 40 'παιγνιον:one may imagine the twinkle in Gorgias' eyes as he reveals in the very last word that he regards the whole paradoxical composition as a game'. Cf. LS, s. v. III4 'trifle'.

(31) Cf. Jones, 18. しかし Saïd (178sq.) はむしろこの点に否定的である。

文献

G. Anderson, Some Uses of Storytelling in Dio, in: Swain (ed.) 143sqq.

H. von Arnim, *Leben und Werke des Dio von Prusa*, Berlin, 1898.

Th. Buchheim, *Gorgias von Leontinoi: Reden,Fragmente und Testimonien*, Hamburg, 1989.

J. Dingel, 'Troiaroman', *Der Neue Pauly*, Band 12/1, 866sqq.

A. Erskine, Troy between Greece and Rome, Oxford, 2001.

H. Gärtner, *Der Kleine Pauly*, Band 5, 1549sq.

R. Hunter, The Trojan Oration of Dio Chrysostom and Ancient Homeric Criticism, in: Grethlein-Rengakos (edd.), 43sqq.

J. Grethlein-A. Rengakos, *Narratology and Interpretation*, Berlin / New York, 2009.

飯尾都人(訳), ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』Ⅰ, Ⅱ, 龍渓書房, 1994.

C. P. Jones, *The Roman World of Dio Chrysostom*, Cambr., Mass., 1978.

G. A. Kennedy (ed.), *The Cambridge History of Literary Criticism*, I, Cambridge 1989.

J. F. Kindstrand, *Homer in der Zweiten Sophistik*, Uppsala, 1973.

G. M. Kirkwood (ed.), *Poetry and Poetics from Ancient Greece to the Renaissance*, Ithaca / London, 1975.

H. Lausberg, *Handbuch der Literarischen Rhetorik*, Stuttgart, 1990[3].

LS=*A Greek-English Lexicon*, compiled by H. G. Liddell, R. Scott, et al., Oxford, 1996.

A. Lópes Eire, Rhetoric and Language, in: Worthington (ed.), 336sqqq. (on Gorgias).

D. van Mal-Maeder, *La fiction des declamations*, Leiden / Boston, 2007.

J. R. Morgan-R. Stoneman, *Greek Fiction*, London / New York, 1994.

D. S. A. Potter, *A Companion to the Roman Empire*, Malden / Oxford / Carlton, 2006.

P. Pucci, True and False Discourse in Hesiod, in: Kirkwood (ed.), 29sqq.

D. A. Russell, *Greek Declamation*, Cambridge, 1983.

Russell, *Gorgias: Encomium of Helen*, London, 1982.

S. Saïd, Dio's Use of Mythology, in: Swain (ed.), 161sqq.

G. A. Seeck, Dion Chrysostomos als Homerkritiker (Or. 11), RhM33 (1990), 97sqq.

S. Swain (ed.), *Dio Chrysostom*, Oxford, 2000.

Swain, Reception and Interpretation, in: Swain (ed.), 13sqq.

G. Vagnone, *Dione di Prusa: Troiano. Or. XI,* Roma, 2003.

I. Worthington, *A Companion to Greek Rhetoric*, Malden / Oxford / Carlton, 2007.